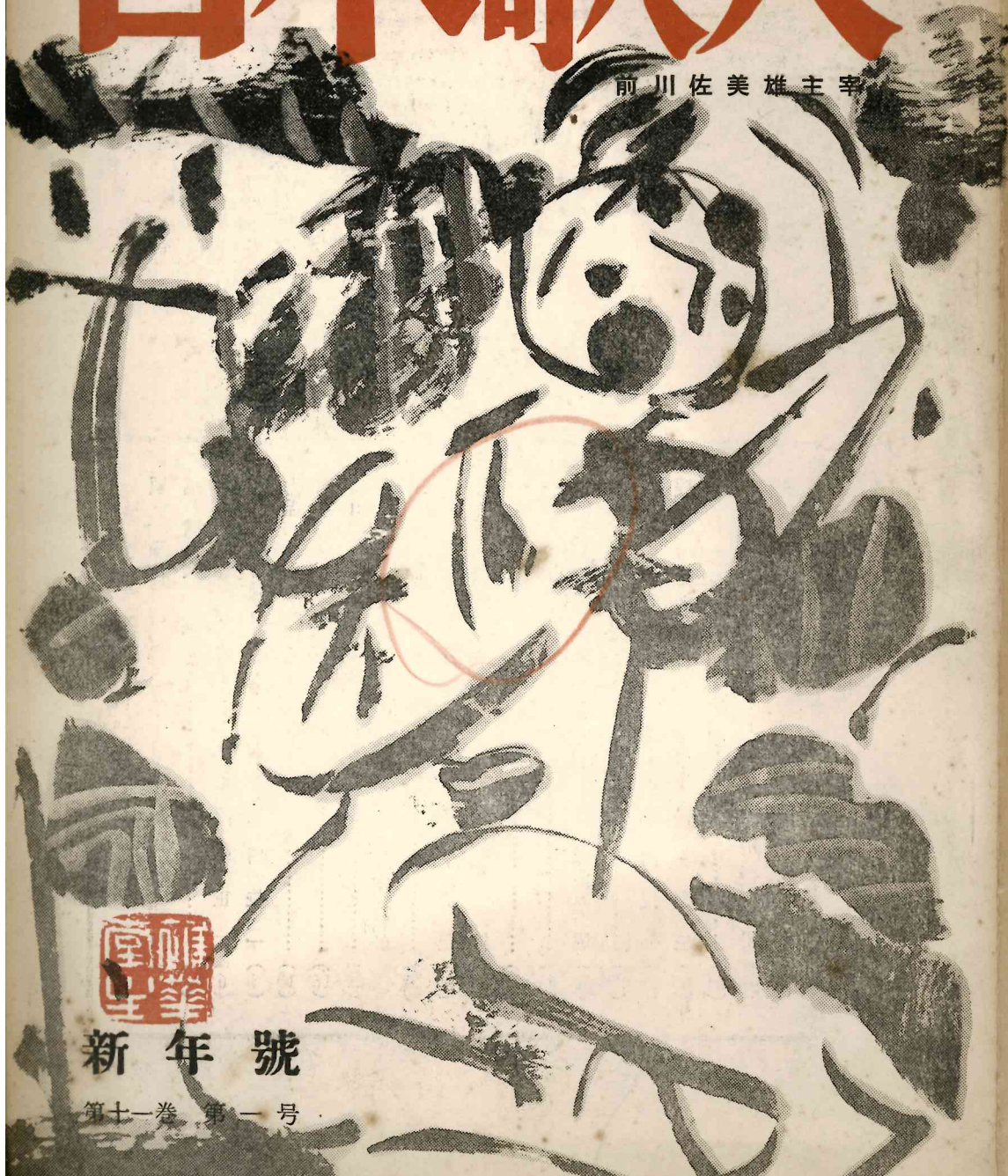


日本歌人

前川佐美雄主宰

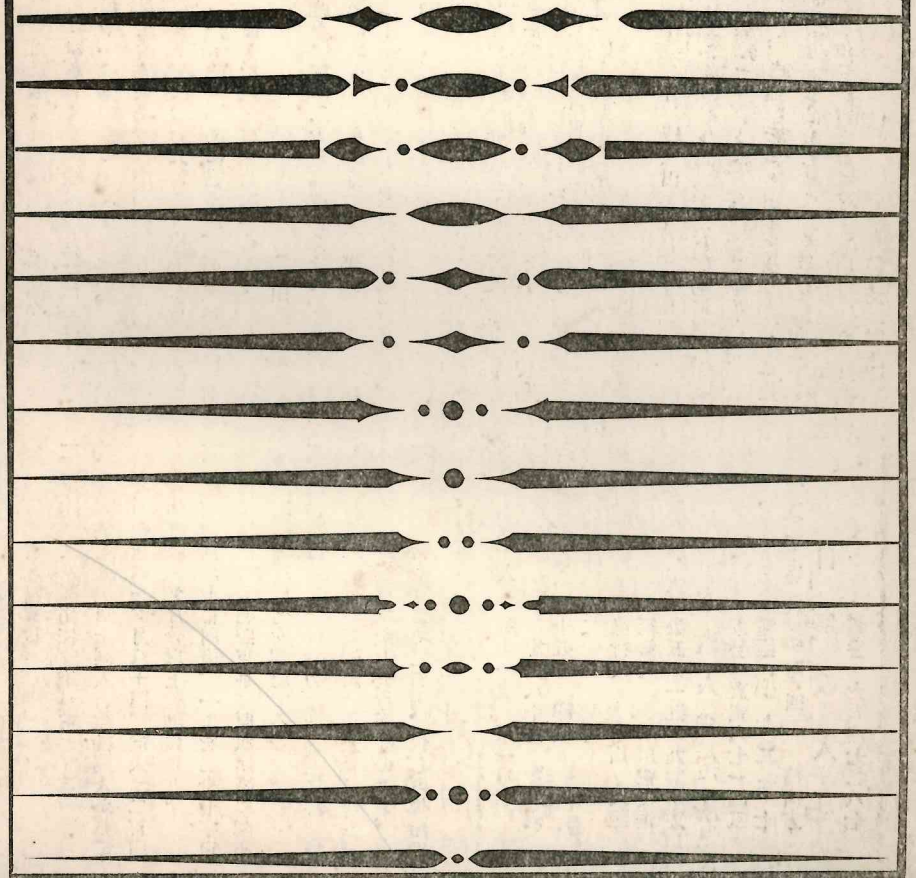
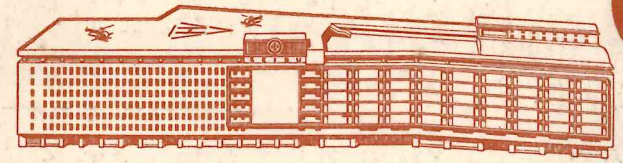


新年號

第十一卷 第一号

昭和三十五年一月十五日印刷 日本歌人第十一卷第一号 昭和三十四年七月三十日 第三種郵便物認可
昭和三十五年一月二十日発行 (毎月一回二十日発行) (通巻一七〇号)

明るく楽しい暮らしの泉



定価 八十円 (送料四円)



日 本 歌 人

1960年

新年号

短歌隆昌の辯

前川 佐美雄

十二月号の「短歌」は、「大学生と短歌」を特輯し、各大学生に発したアンケートの回答を載せてみてつと興味があつた。アンケートは次の三つである。

- 一、愛誦歌又は愛誦歌人の名をあげて下さい。
- 二、現代短歌への関心の有無と其の理由。

一、短歌についての一般的御意見をお聞かせ下さい。

明治、早稲田、東京、青山学院、学習院、共立女子、慶応、実践女子、国学院、学芸、東京女子の各大学生がこれに回答してゐるが、一では石川啄木や若山牧水、それに斎藤茂吉、北原白秋、與謝野晶子などの現代歌人の名を挙げてゐるのが多く、でなければ萬葉の諸歌人で、戦後今日の歌人を挙げてゐるのは、ほんのわずかといふのもあつた。有りて回答してゐても、消極的な関心を示す程度のもので、中には短歌人口の減少化を喜ぶ、かかる意味での関心です。といふいさぎよいのもあつた。強く関心有りと言つてゐるのは極めて尠なかつたが、この人々は三の回答で歌を作つてゐることがすぐに分つた。三の回答は種々まちまちでなかなか面白いけれど、それをここで言ふ暇がない。

このアンケートの結果では、今日の大学生は短歌に対しておほよそ無関心のやうに見える。それでも愛誦歌を挙げてゐる人の割合に多いのはどういふことであらうか。実際に作つてゐる人は甚だ稀だけれど、この百人ほどの回答者中、それが数人もあるといふことは、どうして決してそれは稀などと言へるものでない。

戦中は別として、過ぎた各時代を考へてみる。昭和の中期、そして初期、更に大正時代を考へてみるとそれが分る。今よりは作るものが多かつたなどといふことは絶対でない。それは今よりはもつともつと尠なかつたのだ。学校中探し廻つてやつと幾人かを見つけたらめだつた。今は各大学に短歌会があり、雑誌を出し合同の歌集を出し、また横に繋がる大学歌人聯盟のやうな機関も出来てゐる。若い人々が短歌から離れたのではなく寧ろ昔よりは盛んなのだ。

しかしそれが目立たない。一見衰へたやうにさへ思はれるのは今の時代だ。マスコミのせむだとはかり言つてゐられない。何よりも今日の歌人と歌壇の責任なのだ。狭い歌壇内だけではつまらない。もつと広く一般に愛誦せられる歌を作らねばならない。さうした心掛を持つだけでも頼りにはなる。

日本歌人 新年号 目次

短歌隆昌の辨	前川佐美雄	(3)
皓皓集 作品	(4)
短歌の読者	齊藤正二	(6)
手について見るもの	横田俊一	(8)
作品 I	(10)
作品 II	(16)
前川佐美雄歌集合評	古川・堀内(民)・大宮・片山・宮崎	(22)
珊瑚集 作品	(28)
白詩 二首	田中克巳	(30)
名状し得ぬもの	芳賀 檀	(32)
一月集 I	(35)
一月集 II	(42)
選後 小語	前川佐美雄	(51)
一九五九年の日本歌人	(53)
奥丹後 萬葉紀行	堀内民一	(61)
秋季吟行会報告	島村新三	(63)
歌 会 報	(64)
奈 良 便	前川佐美雄	(67)
編輯 後 記	(69)

表紙・カット 棟方志功

血色なく指しびらせる一日中ひろい陽あたりに石切られをり

いづこにもこもるひびきと聞き入れは髪は上よりも下よりもオモシロカク

白詩 二一首

隋

田中克己

十月三十日、聖心女子大学で近世史を講ずる時間に、黒板に「菊の香や奈良には古き仏たち」の句を書いた。たゞしあまり句の解釈はしなかつた。僕は歴史の教師なのである。その翌日、出発して夜京都につき、いまにも古い仏たちを見るつもりだったが、京都博物館の随唐展も見ず、もとより古寺の仏菩薩を礼拝する機会にも恵まれなかつた。奈良へは参るつもりだったが、前川先生が十一月二十二、三日ごろ東京へお越しになるときいてゐたので、それに安心して、その他のなつかしい歌友たちにも会はないで帰つて来た。そんなわけで、いまとなつては東向北町を突き当り左へ折れての前川邸右へ折れての奈良女子大と、いまだに忘れぬ界限なつかしくて、残念である。かういふ情はウエツトだといつて、今の若い人にはきらはれるのである。いつて何になるのだ、といふのが主な理由であらう。しかし詩や歌は、いつて何にもならないところにあるのだ、と僕は頑固に信じてゐる。たとへば白楽天の「憶江柳」といふ詩は

曾栽楊柳江南岸 　　むかし柳を楊子江の南岸に植ゑた
一別江南再度春 　　江南に別れてから二回の春を見た。

遙憶青々江岸上 　　はるかに青い江岸のほとりを思ひやる
不知攀柳是何人 　　わしの柳を誰が手折つてゐるか。
といふのであつて、若い詩人はフンと笑ふだらう。くはしく調べるひまはないが、江南が蘇州を指してゐるとすれば、その長官をやめて二年め洛陽にゐるの吟だとすれば詩人の五十七才の作である。僕など東京にゐて、疲れたとき、ふと大阪の旧居に植ゑたフランス菊を思ふのも、ゆるしてもらへると思ふ。しかしはたして柳のことを白楽天はいつてゐるのだらうか。折花攀柳といふ熟語があつて、花柳といふ語がほかの意味をもつことは、周知の事実である。江南にのこした歌妓のことをいつてゐるのだらうか。手許にある久保天随先生の「白氏評釈（明治四四年刊）」をひらいてみると、もとよりそんな解釈はしてゐない。僕は苦笑しながら考をもとへ戻すそしてフランス菊から、飼つてゐた猫、訪ねて来た教へ子とまた連想して、こゝまではいいのかと思ふ。その先は？僕には連想の種子が無いのである。

「邯鄲至夜思親」といふ詩は、もつとすなほに解釈できる。

邯鄲駅裏逢冬至 　　邯鄲の駅亭で冬至の日に逢つた
抱膝燈前影伴身 　　膝をかかへて燈の前になると影だけがつれだ
想得家中夜深坐 　　いまごろ家ぢうでこの夜ふけにねないで
還応説著遠遊人 　　遠くへ旅してゐる僕のうはさをしてゐるだらう。

歌へといふのか。しかしなぜ歌はねばならないのだ。理路整然と説く方がいいのではないか。怒りが理路整然と説けるかといふひとあらうが、整然と説けない怒り手が、必ず敗けることは感情過多でしかも喜ぶことより、怒ること、悲しむことの方が多い僕の経験より間違ひなく証明できるただ一つのことである。

岑参の詩の遙知兄弟登高处、遍插茱萸少一人といふのと、非常によく似てをり、もとより後から作つた白楽天が模したに相違ない。岑参が九月九日の重陽の節に作つたのに対し、これは冬至に作り、丘にのぼつて故郷を思ふ岑参に対しては、旅宿の寒燈をもつて来てゐる。二つながら存してよいと思ふが、唐詩選にのせられ、人のあまねく知る岑参の作とくらべると、やはりいく分の見劣りはする。ともあれ、懐郷はひとみなに共通の感情で、たくみに歌ひ得てゐると思ふ。

そこで——詩人となほ称されることを辞しない人があるとするればだが——僕は警告する。諸子はプラカードを詩と称するな。新聞の見出しを歌にもちこむな。僕は詩をはじめたときに教はつた。もう菊や赤とんぼを歌ふな、花の名は洋花に変へよ、菊のかはりにはバラ、松のかはりにはヒマラヤ杉、うどの代りにはアスパラガスをもつてせよ。京都・奈良は歌ふな——それはもう古いのだ。その代りにラスベガスといへ、ニューデリーといへど。

しかしこの詩でも、僕みづから引きながらなんだか恥かしい気がしないでもない。いまさら懐郷とは何だである。邯鄲は古来、繁華で有名なところ、白楽天の故郷、新鄭県よりは少くとも賑やかなところである。何たるセンチメンタルといひたくならう。小説家といはず、詩人といはず、センチメンタルであることは、当世恥づべきことと思はれてゐる。故郷忘じ難しといつたのは高見順か、故郷は遠くにありて思ふものと歌つたのは室生犀星か、いづれももはや笑ふべきことと考へられてゐるのではなからうか。

これが「邯鄲至夜」の訳で、詩人には肉親がなく、しかも燈はやはりともつてゐるのである。

日が暮れて行く、そうら見ろ
監獄の中にもランプが一つ点いた
美しい光よ、なつかしい理性よ
監房の中でおれたちは皆一人ぼつちだ
（アポリネール 「獄中歌」 堀口大学訳）

人であるかと思ふが、ひよつとしたら歌人よりは文壇の方にその分る人が多いかも知れない。芥川龍之介は香取秀真作の銅印などを愛惜してゐたし、横光利一は本の奥附に自作の印を押してゐた。かういふ例は他にもかなりあつたのを知つてゐる。歌人はさういふ趣味を持ちあはささないのか、或は趣味はいけなものとして嫌つてゐるのか。

楠瀬日年翁は大和に住んでゐる。それを教へてくれたのは、その写真を撮りに行つた永田氏であり、永田氏を案内して行つた笹部省三氏である、省三氏は桜で有名な笹部新太郎氏の弟だが、志賀直哉さんが奈良にをられるころ、出入りしてゐた物知りである。灯台下暗しといふのか、楠瀬日年翁が奈良のそれも五条山に住まはれてゐるといふのは初耳だつた。薬師寺や唐招提寺のすぐ近くだが、誰もそんな話をしなかつたからだ。楠瀬翁はもはや十八才を超されてゐる。篆刻が流行りうさつたといふやうなことも無関心で、悠々自適、好きな道をたのしんでゐられる。だから頼まれたつて却々うんとは言はず、うんと言つてもいつ仕上るかは分らないさうである。

○ 奈良春日山の隣りの高円山にドライブウエ

イがついた。そして頂上に高円山ロッヂといふのが出来た。開山式を行ふといふので行つてみたが、道路は舗装中である。ロッヂはその語のやうに下宿屋風の建物かと思つてゐたら、自動車ごと泊れる割合感じのよいホテル式ホテルであつた。この高円山開発は、先に新若草山ドライブウエイを強行して問題を起し、それが紛糾してまだ解決してゐない同じ会社が別会社を作り、今度は奈良市を味方にしてこれもまあ強行したといふやうな具合だ。

新若草山ドライブウエイは東大寺をはじめ関係学者達から文化財保護委員会まで挙つて反対した。今も反対してゐるけれど反対してゐるうちにも敷築境がいつの間にか出来てしまつて却々の繁昌である。そこで今度は高円山に目をつけたわけだ。高円山は聖武天皇の離宮があつたが、その跡は定かでない。この方は新若草山開発の時よりは反対の声が小さい。私もむろん反対側に立たされてゐたが、しかし奈良も史跡や古社寺や古美術だけに依頼してゐたのでは食つて行けない。何よりも生活しなければならぬのだから、そこはさういふのを研究する為他に所から来て奈良に便宜的に住んでゐる学者達と意見が相違する

のはやむをえないことだ。私は反対でも反対の仕方が違ふし、ある場合には開発大いに結構、しつかりやれと唆けもし、尻押しもしてやりたいといふ気がある。実際学者達の言ふことを聞いてゐたのでは、道一つ付けられないし、家一つ建てられない。必ず何かの史跡にぶつかるといふのが奈良なのだが、いつ迄も現状のままにしておきたいのが、学者や奈良に憩ひを求め文化人達だ。しかし一般の人は決してそれを懲してゐない。

だから高円山開発といふことでは私はかなり同情的だ。この会社の社長はまだ若い、神仏の信仰に篤い。横紙破りで、むちやくちやをやると評判されてゐるが、筋が通つてゐるので傍から見るとさう厭な気がしない。私は面白いと思つてゐるが、それで開山式にも出かけて行つた。それは神式と仏式とで行はれたが、反対してゐる社寺関係及びそれらの学者達は誰も姿を見せなかつた。どうしたのか中沢弘光画伯が見えて、老画伯にしたがつて萬歳を三唱してゐた。

謹賀新年

昭和三十五年一月一日

日本歌人編輯部

前川佐美雄
前川 緑
古川 政記
宮崎 智恵
加藤 正民
大岩 文子

編輯後記

▽新年おめでたく、今年は古い言ひ方をする
と干支のはじめ、子の年である。きつさきの
よい年である、日本歌人も東京での第二年目
を迎へる。今年は大発展するだらう。基礎が
固まつたのである。

▽皓皓集、珊瑚集などいふ歌欄を新しく設け
た。よき作品をここに展示する。よき作品を
選択してかかげるので、毎月人が変る筈であ
る。この欄に注意されたい。

▽新年会は奈良と東京の両方で開く。去年は

なかつた日本歌人賞はこの日に授賞する。ま
た今年新しく日本歌人の立場を唱道する。
にぎやかに参会していただきたい。

▽私の奈良便と選後小語は毎月つづける。特
に選後小語に力を入れる。出来るだけ初心者
にも分るやう平易に書くが、高さは失はな
い。よき新人を育成したいのが念願だ。

(前川佐美雄)

▽前号は実は二十日には出来上つたのですが
全国のストライキに会つて、郵送は大分遅れ
てしまつたようです。方々からお叱りやら、
照会やらで恐縮しました。

▽今年こそは、日本歌人の大発展を目ざす年
だと思ひます。昨年は私にとつて、生涯の中
で一番忙しい年でした。今年はいくらか緩和
されるやうですから、大いに作り、大いに論
じ大いに出したいと思ひます。

(古川 政記)

▽一月号に芳賀檀、田中克己、横田俊一、齊
藤正二の諸氏から玉稿を頂き感謝に堪へませ
ん。表紙とカットは、棟方志功氏にお願ひし
ました。幸福な新年の出版を祝します。平凡
な言葉ながら心をこめて、今年をどうぞよろ
しくと御挨拶申し上げます。

(宮崎 智恵)

日本歌人規約抄

- 一、日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
- 一、日本歌人は会員と同人と維持同人から成る。会員は一ヶ月八十円、同人は二百円
それぞれ三ヶ月分以上前納のこと。
- 一、投稿歌数は十首前後、一首を二十七字以
内に楷書で大判四百字詰原稿用紙に認め
末尾に住所氏名を明記すること。
- 一、原稿は毎月二十日締切(翌々月号に発表)
奈良日本歌人社宛送附。入会及び会費そ
の他は東京日本歌人発行所宛のこと。
- 一、添削料は十首まで二百円、但し返信用切
手封皮同封のこと。

日本歌人 第十一巻 第一号

定価八十円 千八円

昭和三十五年一月十五日 印刷

昭和三十五年一月二十日 発行

発行人

古川 政記

編輯人

前川佐美雄

東京都北区東十条五ノ一五ノ九古川方

日本歌人発行所

振替 東京六七一四五

電話 〇七二二三七

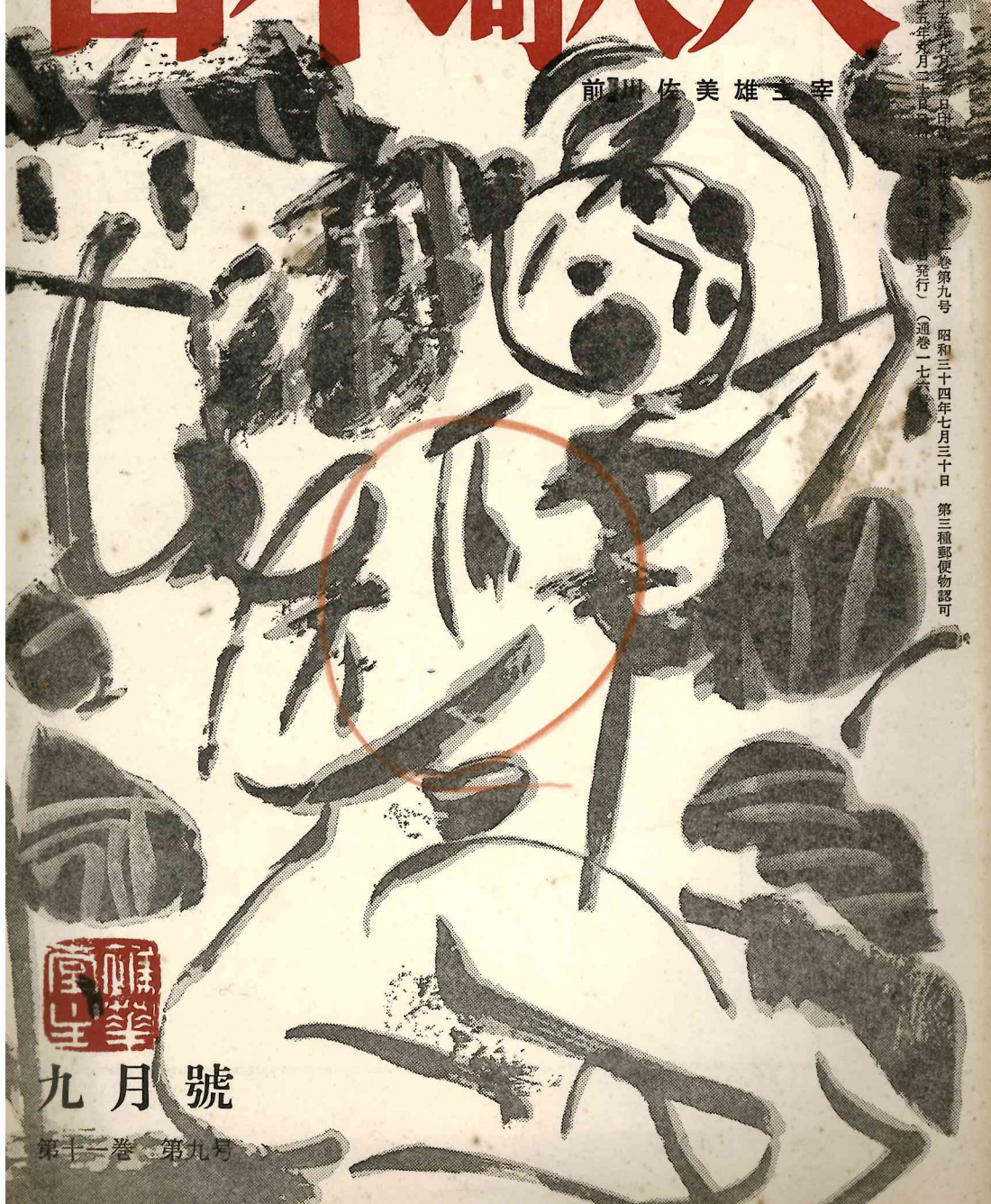
奈良市坊敷屋町四一 前川方

日本歌人社

振替 大阪四七二八七

人歌日本

前川 佐美雄 主宰

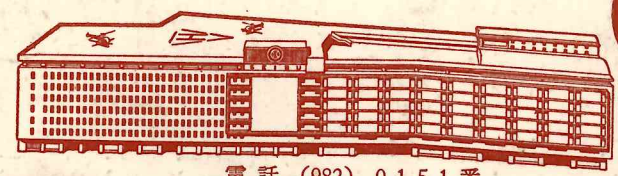


九月號

第十一卷 第九号

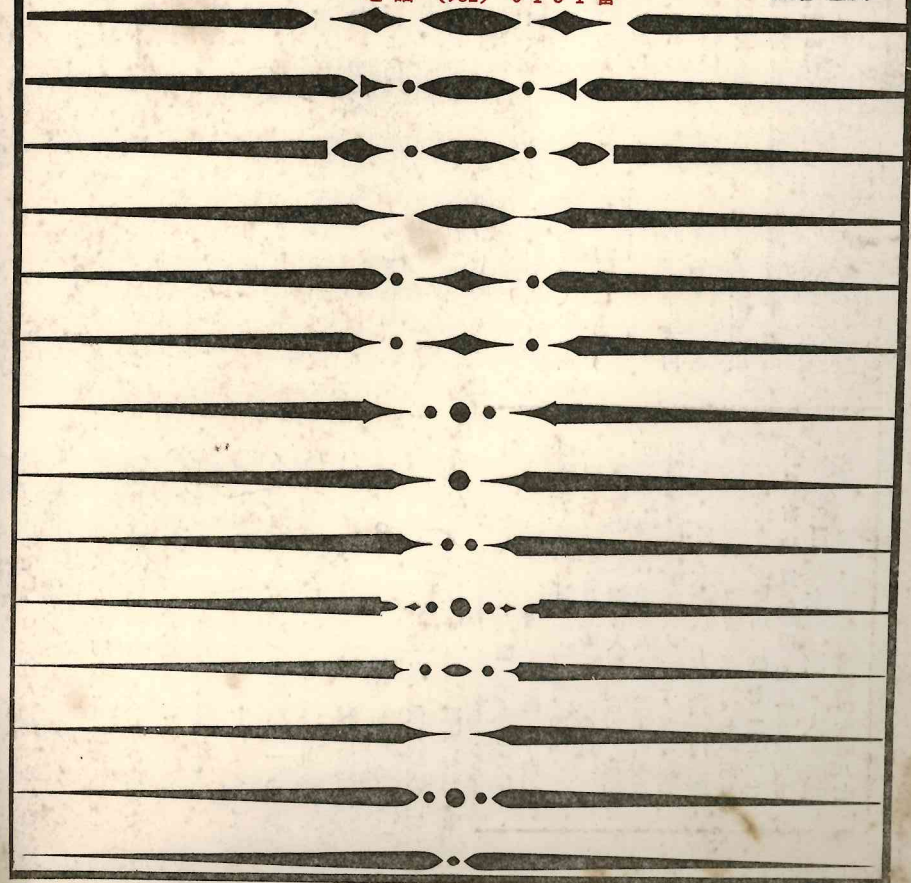
昭和三十三年九月二十日発行
昭和三十四年七月三十日 第三種郵便物認可
昭和三十五年九月二十日発行
日本歌人第十一卷第九号 (通巻一七六号)

明るく楽しい暮らしの泉



池袋
西武

電話 (982) 0151 番



昭和三十五年九月十五日印刷
昭和三十五年九月二十日発行 (毎月一回二十日発行) (通巻一七六号)
日本歌人第十一卷第九号 昭和三十四年七月三十日 第三種郵便物認可

定価 八十円 (送料四円)

日 本 歌 人

1960年

九 月 号



常識について

歌は計算するものだと言つたら、それはいつたいどんなことかと問ふ人があつた。これについての答へはむづかしい。人によつて問ふことも異なるなら、答へもおのづから異らざるをえないからだ。しかし妙な計算をされたのでは却つて変なことになる。

それよりは計算なんか考へるな、そんなことはしない方がよいといふことの方が大事なやうな気もする。誰の歌を見てもみんな覚めてゐる。ひややかなのだ。冷静なのである。これは一応これでよいだらう。しかしそれだけではない。燃えたつものがないのだ。情熱がないのである。この両方がなければならぬのだが、さうしてこの二つを格闘させるところに常識を飛躍したものが生れて来る。それが歌であり詩であるわけだが、今はそれがなないために常識にとどまるか、それ以下のものになつてゐる。

燃え立つ時代でないと言へばそれまでだが、さういふ時代だと思ふなら、いつさう燃え立つものがなければなるまい。それが歌なるものの心である、詩人の心といふものだが、これは常識を踏まへて言つてゐるのである。常識こそ大切である。軽蔑してはならないものだが、しかし歌は常識ではない。常識を決して尊ばない。自然や風景を描写してゐるものの歌は多く常識的で、それ以上ではない。むしろ常識に至らないものさへある。これに反して新しいと言はれる非写実風の歌の多くは常識を超えようとしてゐる。それは悪い筈はないのだが、じつは超えようとしてそこから逸脱してゐるのである。その意味でこれも常識以下だと言ふほかはない。

このところがむづかしい。このむづかしさを知るほどのものは勇氣を持つかばりに怯懦となり、先人の歩いた道に逃避する。安全だからだが、それ故であらう、今日の歌はおしなべて小粒である。

(前川 佐美雄)

日本歌人 九月号 目次

常識について	前川佐美雄	(3)
皓皓集 作品		(4)
勇と啄木との新風	大上敬義	(6)
作品 I		(8)
作品 II		(13)
前川佐美雄歌集合評	古川・堀内(民)大宮・片山・宮崎	(19)
珊瑚集 作品		(26)
九月集 I		(29)
九月集 II		(34)
蟠花批評集		
亀井勝一郎	保田與重郎	齊藤磯雄
結城信一	石川信夫	堀内民一
中塩清臣	山上伊豆母	大伴道子
山中智恵子	吉岡 実	石塚友二
久保田正文	田中克己	齊藤正二
編輯後記		(67)

表紙・カット 棟方志功

○
まだ暗き天より鷺の声のして夜明けまで今しばらくと思ふ
ありありと目覚めてをりて天翔くる鳥の声きく低き天井
風ぐもり寒き五月の朝を臥し耳さく物音を聞きとむ
むごたらしくわが腹の中あらはにも隠すすべなく透かし見らるる
冷徹にレントゲン線わが腹の醜悪のなべてを照らし出しけむ
病みをれどをとめなりせば眉かきて五月の真日を眩しがりつつ
夢にさへ友を呼びるし同室の少年はやく癒えてかへれり
藤の蔓ゆきゆき風にそよぎつつわれ退院の車に乗りぬ

○ 豊田智恵子

考へる意慾なくなり熱をもつ眼の何も見えず雲低く垂る
秘め事にふれず緑のプラインドをおろして陽を避け向ひあひをり
黄緑の陽がやはらかに満ちし時掌の中の夢素直に放ちぬ
鉄の板にはさまれし重き胸にありて息苦しくも夜を疲れたり
手術後の経過悪しと言ふ声のパス待ちをれば風に乗り来ぬ
麻酔効きて寝入れる少年の細き腕が無気力におかれ汗ばみてぬ

○ 望月 葉

花苑にねむれるがごと白き猫わが病む夜着の足もとにおもく
カーネーション贈りおくられる人なくて金魚泳ぐ店に花えらみする
竹寺にスカンポの料理たうべつつ山うぐひすを聞くはさびしえ
山峡に松の実おちぬ土と木のかをりたちちめて春はひそけし
山桜さぞの嵐にいろあせて青ぎる水に落花し止まず
トルコ展宮廷服や楯のいろ異国はかなしその上の代の

歌集「蟠花」評

蟠花断想

亀井勝一郎

「蟠花」を読んでゐて、「むざんやな甲の下のきりぎりす」といふ
芭蕉の句を思ひ出したのはどういふわけだらうか。「自己」を剥ぎ
「自己」を滅亡させてゆくやうな、一種むざんな自虐のすがたのた
めだらうか。しかし東氏のこれがつきつめた青春像であることはた
しかだ。自作を見る作者の眼には、いつも悔恨と羞恥の念が浮んで
ゐるものだが、「蟠花」はその眼をもつてもう一度、二重に自己を
語らうとしてゐるやうな歌集である。生ま傷がたえないといふが、
その生ま傷の生まさが全体に感じられるのはそのためではなからう
か。

うつそみの命ひとつを追ひつめて骨さむざむと風に鳴るべう
かういふところまで行きつくだ。「骨さむざむと風に鳴るべう」
の「鳴る」が東氏の詩魂の音のやうなものではないか。しかし
当然のことだが歌の多くは枯れてはゐない。もうすこし枯れて、あ
の生ま傷の生まさが消えるといふと思ふのだが、青春は絶対にそれ

(角川文庫) 前川佐美雄歌集

亀井勝一郎解説

価 八〇円 下 八円

「春の日」「植物祭」「白鳳」「天和」「天平雲」「紅梅」
「積日」の七歌集、及び戦後未刊の各歌集より合計約二千
首を厳選抄出し、前川佐美雄の全作品を鳥瞰せしむ。巻頭
に著者小影、巻末に年譜を附す。

角川書店

東京都千代田区
富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八

東 博 著 歌 集 蟠 花

定価 三五〇円
送料 四〇円

跋 安東次男 B6判二二〇頁
挿画 駒井哲郎 上製 箱入

内的成熟よりも外形的腐心の痕が目につき易い現代短歌の
中にあつて、誠にこの作者は「こころにまことありてかな
しびそふる」歌の最後の人である。僕にはこの歌集は梶井
基次郎と同じ様に秘かな伴侶となつてくれるだろう。

(跋より)

東京都千代田区神
田神保町一之三 ユリイカ

をゆるさぬものらしい。「自己」を剥ぎ、「自己」を滅亡させなけ
ればやまないといつた情熱がある。「蟠花」はこの意味では自己埋
葬の歌といつてよからう。

* 春浅きかかるいく日を崖の上ゆかしめしもこころの愁ひ
比較的無難な、作者にとつてはあまり意に介しない歌かもしれな
い。「こころの愁ひ」といふ平凡な表現と、「崖の上ゆかしめし」
の一句によつて、この場合は私は穩健に、東氏の詩魂に近づきうる
やうである。「遠方の空の茜に湧くごとき」思ひにも通ずるであ
らう。或は「火を噴くゆゑにかなしその山」の思ひにもむすびつく
やうだ。

激しい自己埋葬とともに、さういふ自己への挽歌が東氏の抒情の
根源なのだ。この二重操作が、実は「蟠花」の生命ではなからう
か。同時に、たぐさんの歌をつくつて、実は何ものをもつくらな
つたやうな空虚感が、悔恨と羞恥にならんで、ぽかりと口を開いて
ゐる。「火を噴くゆゑにかなし」の一首の余韻を思ふべきである。

* 東氏の歌には、とぼけてみせることも諧謔を弄することもしない
一種の嚴肅主義がある。氏を孤独にみちびくのはこの嚴肅主義かも
しれない。必要以上にわびしがらせ苦悩をもたらすものこの心境で

はなからうか。「点滴のしきりなる夜を低唱し微吟しあはれあはれ十年がほど」(「桜桃忌前後」)。かういふ歌のなかで、下半句はどうでもよく、ただ「点滴のしきりなる」音を自分の内部に聞いてゐる心境に私は心ひかれるのだが、この心境を潤達に自ら笑つて、諧謔とばすことも可能なのだ。しかしそれを拒否するのが東氏の歌風である。なるべく自分を追ひつめてゆくやうに、また追ひつめて行かなければ気がすまぬと言つたもの、それは氏の倫理なのであらうか。

魂叫び土に潜める諸声ときほひたりしも身はずでに墮つ

遠き代も空に歌ふのひかり生れわが祖のどち仰ぎたりけむ

こみあげて嗚咽とならば救はれむ内に直向ふは消しがたかりき
私はここに三首しかあげないが、自己凝視の涯にきた叫びのやうなもので歌集の全体がみだされてゐる。むしろ叫びの断片と言つていいかもしれない。私はふしぎに思ふのだが、それは短詩型ではみだされない性質をもちながら、上の句、乃至は下の句、そのいづれかに断片のまま絶句してゐる場合が多い。右の中の「身はずでに墮つ」「仰ぎたりけむ」は、さきの「こころの愁ひ」「あはれあはれ十年がほど」と同じやうに、上の句の叫びに対しては平板である。

下の句は上の句に対して、技巧的な意味での反逆児でなければならぬ筈だ。芸の上で、もつと意地わるい曲折があつてもいいと思ふ。「内に直向ふ」ことの、救ひの無さに素直でありすぎるためであらうか。「蟠花」を私は一冊の「精神の自伝」として読みつづけたのだが、荒れ狂ふ魂をみづから制御しかねてゐる、云はば生ま傷の花卉の吹雪やうな印象をうけた。

*

桜島うすくれなるのけむり立ちわが少年の夢の通ひ路

これは美しい歌です。ただ純粹です。愛誦に耐へる歌です。この情緒には、この表現(夢の通ひ路)がふさはしく、昔のしらべが現在に生かされてゐます。また少年の日の感傷と今日の思ひが一首の中で混然としてゐます。この錯乱はよろこびです。これに比べると「少年の日も悲しみて……」の歌は言葉余るものを感じます。さらに「かなしやな一基の墓と……」の歌になりますと、ことば多くて余情削られてゐるやうです。しかしかういふ表現をさせる底には、やはり一時代の若者の共通してもつた感情を感じます。その基底は純粹で、又抽象的なものです。

われとわが身ぐるみ何かにゆだねたく家を出ては昔におぼる
当時の若者は、今の入ほど、単純に結論をもつたり、党派的指令に従はなかつたのです。単純でなく、しかも理念的で、純粹であつたことが、表現上のことば過剰や、一種のデカダンスをうんだのであります。そのころは自意識の過剰といふことが流行しました。が、「蟠花」を見てもわかるやうに、単なる自意識といふよりも、自他の間の谷間におかれた意識といふ方が妥当と思ひます。自分自分の中の深淵においた状態です。それは誠実です。「蟠花」にはさういふ誠実がよく出てゐます。従つてその過剰な表現は、誇張でなく、必要だつたのです。

きさらぎの中の一日を吹きしまき群落なせる雪なだれする
この四句を必要と感じたわけです。それは精神の一種の治療だつたのです。さういふ種類の文芸の当然の存在権を我々は時代の中で必要しました。しかしさういふ主張をする考へを自覚するとともに、さうした表現は、この歌を例とすれば、これの表現のもう一つ外側

東氏の悲心、慟哭、さういふものが、たとへば「鎮魂抄」などになると、この連作は連作として一貫した生命をあらはしてゐる。歌集の中で一番とのつた部分である。とのつたといふ意味は、過不足ない悲しみのしらべが連結し、その激しさも鎮まりも、高低とも一曲にまとまつた音楽をきいてゐるやうだといふことだ。鎮魂歌として出色のものではなからうか。

若びとが立ちの門出や祝ぐらくはあまり清しき眸に哭かゆ

みんなみの島の礁に常水漬き妻よ吾子よと相呼ばすらむ

葛城の神も哭きませ美し国大和亡びしこの日の涙

戦時中のおびただしい歌や小説のなかで、このひそかに、しかも思ひあまつたやうなしらべを奏でたことを私はいま驚いて眺めてゐる。戦争を清潔な心で堪へ忍んだ人の歌である。

蟠花読後感

保田与重郎

「蟠花」を読んだ感想を全般的に云ふと、昭和初年の若者がもつてゐた焦燥感と、表現過剰な気負を感じたことです。同時に、これが大事なのですが、その根柢の清澄な、純粹性を味ひました。「鎮魂抄」にも、さういふ純粹性と、一種の心情のラヂカルなものが、混沌としてゐるやうな、清冽な流れが感じられます。次に歌をあげながら感想や批評をしるしてみます。

ですべきだと、私は考へました。さうした時に、その場所で文学の危なさ(これは芭蕉の危きに遊ぶといふ考へ方の危なさです)を感じ、その上で文芸論を立てねばならぬこととなります。この歌に即して云ふなら、もしこれが一、二句と五句の雪なだれだけでとめると、俳句になるわけですが、この方が説明も弁解もないだけに、果敢と申せるでせう。(もつとも歌と俳句は、全然別箇の世界をもつてゐるものです)同じならびにある「夜に入りて……」の歌の「心に」にも小生はかういふ意味の難を感じます。これも説明してゐるのです。説明は弁明に通じます。浪漫的な文芸観は、弁明を嫌ひます。無縁の衆生の存在を諦観し、ただ果敢と勇氣を尊びます。説明弁解しないためには、勇氣がなければなりません。疾風迅雷の氣風が根柢になればなりません。疾風迅雷を春風の如く現すのが人間の自然に対する態度の一つと考へます。この中で小生は古典文芸と古典人を尊重したのです。

少年の日の暮れ方もかく怖ちてあやめわかたぬ人恋ひをせり
即ち二句の「も」に迷ひます。

汝が髪の香に立つ匂ひむせばしく心も空に何おもひけむ
せきあげてなに言ふならしをみな子の絶えだえ声も風に消えに
し。

汝が髪の方の二句三句如何でせうか。しかし傍点のやうなことに導かれる歌は、私は認めます。遊びでもよろしい。ひとりて古に遊ぶのもよろしい。

とよもしてひびきひとつも伝へよと恋ひ祈む思ひに寄りし心は
わが国の古典と古俗に従つて「恋祈む」「思ひ」「寄りし心」を
正確に解釈した場合実に面白い歌です。かういふ一人の楽しみ、僅

かに理解者あれば満足するといふやうなかまへの歌を作ることは、作歌の楽しみで、同時に、己が生成の理をなす所以でせう。かういふ手のこんだ歌を作ることを、小生は大いにすすめます。しかもあたりまへの人には、誰にも通常事としてわかる筈です。「とよもして」と、「ひびきひとつも」は、一見不釣合のやうですが、こと成就の凱歌ですから、面白味、軽味をここにふくめてゐるわけです。この歌にならぶ「君ゆゑの……」も面白い、「あやめむらさき」が、軽くて結構です。

つたなくて過ぎしと思へうつそみのうなじは、風に吹きさらされ思へと肩をはつた姿勢については、作者今後の心の構へとして問題をふくむ筈です。「は」「に」「つ」で形成する調子も同断です。真の強弱の問題、真の清濁の問題のかなめとなりさうです。

曇天にりんだう一つ疎み咲くわれが二十歳に通ふあはれさ「疎み咲く」とまで言はねばならなかつたのでせうか。かういへば、ここで切れて、完了してふのです。もう少し、息の長い調子の方がよくはないでせうか。これも心持の問題です。

空し手を垂れてけふ見る夕茜むごき季節の日ゆき月ゆきこの歌にも同じことが申せます。下二句が附句めいてゐると思はれます。

目白坂吹きくる風をまなかひに受けてわが見る夕茜雲この歌の方が、人生の哀愁も苦悩も、さらにそれを風おもてたへてゐる人の悲しみやさびしさ、その根柢の雄々しささへ出てゐるかによいと思ひます。

本郷台高樹の上を渡る風の深みゆく秋に何を思はむ

忍辱の歌

——東博歌集「蟠花」——

齋藤 磯 雄

いつの頃どこで読んだのか全く忘れてしまつたが、深く私の記憶に刻まれ、回想の目録中に座を占めてしまつた歌がある。

激しゆく昂ぶ心とはかな心あひとよもして明日の身仕度
ヴィオロンの齊奏にトロンベットの狂熱を加へてクレッシェンドを示すこの「昂ぶり心」と、陰惨な打楽器に刻まれて低くわななき続けるセロの短調「はかな心」と。——この激しく奇異なフーガの複雑な和音がとよもしてゐるのは、厚い壁に塞がれた暗黒の一室であり、そこに聴衆はゐない。といふのもそれは、無口で孤独な男の、固く閉された胸の中だからだ。この男は、黙々として何かの身仕度をしてゐる。しかもそれは世にも平凡な男の、世にも平凡な動作である。電車が明日の朝もビル街に吐き出す数十万人の中の一入、それが今宵も機械的に繰返す動作——恐らく上衣にブラシをかけるとか、汚れた靴下を取替へるとかいつたみじめな動作だ。……落魄したもののふの襦袢をまとふ姿が痛ましいやうに、現代社会の「凡庸」に身を包むこの「詩魂」は傷ましい。

手力のなしと思はねわすなくて著ぶくれしわれの秋から冬へ
無為にしてけふの在処のかなしげば岐きについねむとぞする

病み臥やるわれ騒がせて高くや秋風のむた胸門押しあげ

作者は、自分の気持を華麗なことばに投げやつて、沢山のことは惜しげなく、ことさら無駄づかひしてゐますが、真実は孤独を感じさせるさびしい人のやうに思はれます。そしてこれらの歌をみると、毅然としたものを、精神のものを保持してゐます。これは立派な歌です。かういふ申し分ない歌を次に何首かひろつてみます。

枕べにいく日保たぬ花なればつばらかに見む朱のともしき
かりがねの天ゆくときはきみが霊最上川辺にこもらふらむか
言はざれど君はわが師と若きかの酔ひ泣きの日の心の扱処
あとの二首は茂吉追悼の歌ですが、いづれも美事です。いづれもますらをぶりです。

限りなく遠き記憶をたぐりよせ時に錯覚す霜夜こほろぎ
これは手のこんだ、こまかい心づかひのある歌で、作歌手腕を十分に感じます。又極めてインテレクチュアルなところ、近ごろ得がたい作者と思はせました。

みんなみに北に東にはた西に伴の隼雄が行きとどまらなくに
古典の歌境よりも一段朦朧とした調べ、最も空気の稀薄な高山の上にあるやうな、さらにいへば、ミュトスの雲間氣に到達した歌です。人間と人生の、純粹な哀愁、永劫な寂寥感、壯観と悲哀が融和した美事な歌です。戦争の時の歌と記されてゐますが、これは私が知つてゐる戦争であります。「隼雄」の「が」が、結末の「に」に相応じ、不思議な心霊的イメーヂをかもしてゐるのも、云ひやうないほどにありがたく、しらべと世界があつて人間臭さが全然ないのは、ことにめでたいところで、正に「鎮魂」の古義にかなふものと云ふべきでせう。

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

(燈下吟)

どころか、少くとも外見は、日々の職務を細心に謙虚に果してゐる市井の凡夫にすぎまい。

きつちりと手足そろへて暮すがに何頼むなきわが明け暮れや

(裸身)

しかしながら「手力のなしと思はねむすな」きを歎くその執拗な激しさは、不遇を啣つサラリーマンの愚痴はもとより、階級の不満や社会的反抗を遙かに超えて、一種形而上的憂愁の性格を帯びてゐる。それは一再ならずツルゲーネフの「神なき殉教者」やボードレールの「潜める火」を想はせる。この、用どころなきエネルギーの意識ほど、近代的なものはない。功利社会の群居精神の中に介して為すすべを知らぬ徹底的に孤独な精神。「蟠花」の作者は何よりもこの無為の意識によつて、逆説的に、おのれの存在を——存在の重みを——確かめようとするかのやうだ。

何業か未だ爲遂げずいくめぐり無為のなげきはいつよりならむ

(燈影)

うなじ垂れ呻くがごとくこころ堪ゆ煙として神はいづこに在す

(燈影)

けふの日のわれの惨めは言ふなかれそのむなし魂ひとつ抱けよ

(醜辱)

彩なして流るるものにそびら向けわが若年の日は傾くよ

(海山のおもひ)

おぞやわれ心怖ちつついちにの好きなをんなに迫りもならず

(近代恋慕調)

いつよりかするべも神も失ひてあからさまなる夏陽の光り

(旅立ち)

しによつて表現する極めて知的な構成によつて見事である。

せぐくまり師走の風にせめられて唸鳴ふおもひ人に知らゆな

(躊躇)

汗あへて苦しき息も知らゆなとわが目ばかりに遠き街の灯

(街の谷)

轟きて身ぬちを過ぎし一瞬の危かりしをいまは示さず(喪失)

(歳月)

いくたびを扼殺しけむ感情の凍る霜夜のきさらぎ二十日

(近代恋慕調)

風塵の夜の衝のゆきかへり肩にまつはる寒さは言はず

(眼を凝らす)

身ぬちふかくはびこり潜むおぞの奴こいつ殺さずば命危からむ

(春塵)

これらはすべて、わづかに露された一断面によつて、固く閉ざれた内面生活の暗く深い奥行を暗示するのであるが、稲妻の閃きと霹靂の一時の轟きが、嵐の夜の深さを一段と凄じくするやうに、内面生活の謎と秘密は、これらの私語によつて、愈々深まるのみである。三十一音の旋律は、わづかに大気を震はせるや、忽ちはたと止んで、もとの沈黙にかへる。この儚く須臾なる旋律は、表すものよりも仄めかすものによつて、奏でるものよりも呼びますものによつて重要であることを、『蟠花』の作者は何びとよりも深く意識してゐる。……

たわたわと心の破れに膝つける姿祈りに似たりと言ふか

(風のと)

異様な自意識を伴つた絶望の劇的瞬間を、これ以上激しく鮮かな線で描き出すことは困難であらう。しかもこれは、浪漫派の「告白」

あはれあはれ君が死にけるその宵をわれは巷に酔ひつづれをり

(師よ茂吉よ)

木枯に骨さらされてあるときの現身ひとつが持ちあぐねたり

(白い夢)

無為の意識から来る重い悲哀が、抑制されたエネルギーの凄じい激発を示す次のやうな歌は、いかなる動因によつて誘発されたにせよ、この孤独な男の、殆んど狂に近い神経感情の内面世界をかいま見せる。

かなしけれ冬野に喚ぶわが魂と土に這ひなす虫のいのちと

(薄陽)

「かなしけれ」といふ、明らさまで単純な咏嘆の措辞が、これほど重い秘密を帯びて進み、これほど緊迫し充実した慟哭のリズムを刻んでゐる例を、私は知らない。

「秘密」は、この内攻的性格の著しい特徴の一つである。どのやうな独語も、嗟嘆も、鳴咽も、いな、絶叫さへ、つねに閉ざれた内部世界の夥しい秘密を担つてゐる。「蟠花」の最大の魅力はこの「秘密」の重みにある、といつても過言ではない。

みちのくのはいでしのぶの忍ぶ恋石に刻めりみちのくびと

(風のと)

「秘密」は、暗雲低く垂れ下る北方寒土の性格だ。「蟠花」の作者は南九州の生れと聞か、その魂は本質的に「みちのくびと」である。表明し能はぬ、といふよりも寧ろ、表明するを欲せぬ固定観念を、黙々として石に——抵抗多きが故に石に——刻む、この沈鬱なみちのくびとだ。(因みにこの一首は、抑圧されてむなしに堂々めぐりする固定観念、むなしに反復される執念を、同音同語の繰返

や「心情吐露」からは極めて遠い。この「心の破れ」のカタストロフに至る劇は、いかなる揣摩臆測もいかなる好奇の視線も拒む固い沈黙の壁に閉ざされてゐるからである。執拗に持続する暗鬱な劇の、或る刹那、或る一瞬を、色彩、光輝、音響の強烈なコントラストのもとにかいま見せるのは、『蟠花』の詩人の特異な技法の一つである。

うちらより胸突き上げて一せいになだれゆく先の夏深みどり

(昏き七月)

何をこの日照りの街に身を責めてこころ両刃の危きにをり

(シシタの街)

石くれの如きわが身と思ひなすかかゆるふべも空は茜す

(石くれの如き)

身の隅に憤怒はこめて立てれどもすでに切なき若葉の青や

(眼を凝らす)

燃えただれしこの陽のもとに立ち暗み何に憑かれて家に居つか

(春塵)

はたためき蹴込むが如く降りこめば遮二無二われの面さらしつ

(桜桃忌前後)

「映発し觸発するなき」(近代恋慕調)この内攻的精神の苦惱の表現は、多彩な技法の変化を示してゐるが、一言以て之を蔽へば「忍辱の歌」といへるであらう。

むさむさと己れ殺して何すとや壁にも言ふいくとせあま

(白い夢)

こみあげて嗚咽とならば救はれむ内に直向ふは消しがたかりき

(白く夢)

さらばかの二十の年はたちに問はましや誰にささげし忍辱にんじやくの歌

(十年)

哭なみだげばとてなに慰なぐさまむ忍辱の歌にうらみの千萬無量 (十年)

果さざりしねぎごとひとつ言はざればのみとにたまる痰たんの如し

も (繪空ごと)

むさむざとおのが一生ひとよは蔑なみすとも胸門むなと突き上げて言ひ難きもの

そそけ立つ思ひに生きしいくとせをつばらかに歌ひ来しこれの

歌反古 (醜辱)

このやうな引用を重ねてゆけば恐らく果てしがあるまい。しかし

ながら、永続する内的緊張のカタストロフを示す、鬼気迫る自画像

をいま一つ。

いねぎはに立ち眩くらみする夜のならひむかし盡つくくせし修羅が身の

果 (修羅)

更に一つ。いくたびの危機を乗り越えた神経の、異様な沈静を刻

んだこの銅版画。

運命を言ふなかれとぞ遠空の真澄みに冴えて冬樹々の群

(心いままアルカディアに)

「悲哀ハ心情ノ俊秀ヲ示シテ高貴ノ章ナリ」と断定したのは、

『海潮音』の詩人——「なつかしき古き明治の大き魂たま」(師よ茂吉

よ)の二つ——ではなかつたか。

私は、『蟬花』を誦して、これほど深く重い「悲哀」が、軽佻な

昭和日本の狂躁裡に、身を潜め声を吞んで生き永らへて来たことを

知り、実のところ、一驚を禁じ得なかつた。それは、同時にまた、

木枯に骨さらされてあるときの現身うつせみひとつが持ちあぐねたり

この一首は昭和十七年の作であるといふ。多分作者二十三歳の

時のものであらう。

「蟬花」一卷は昭和十五年から同三十二年までの十八年間の歌作

を収めてあるやうだから、右の一首もこの制作期の初頭の頃に属す

るわけだ。歳時記か句集のやうに春夏秋冬の章に分けられてあるこ

の珍しい歌集は、その一首一首がいつごろの作のものであるかわか

らないやうに組まれてある。おそらく作者は自分の歌の性質と傾向

を一番よく知つてゐて、年代順に並べることの無意味をも十分に知

つてゐるのだらう。洗練された感性と厳格な言語感覚、孤独な魂と

沈痛な観念とのみことな調和は、既にはじめから一つの成熟を示し

てゐて、年代を超越した心象風景がその一首一首に叮嚀に織込まれ

てゐる。春夏秋冬の季節の移ろひを暗示するだけでよいといふ作者

の控へ目の主張も秘められてゐるやうだ。

私はこの歌集を読んで、それらの歌の美しい純度や、暗い絳情の

緊迫感に心をうたれたが、それと同時に強い衝撃を受けたのは、私

自身多年にわたつて、しかも現在もなほ、自らかみしめてゐる悲し

みや苦しみ、嘆き、嘔り、悔い、などが、ほとんど「蟬花」の世界

に巧みに表現されてゐるといふことであつた。これはかならずしも

作者の年齢と私の年齢とが非常に接近してゐるといふことだけでは

ないやうである。これらの歌が、昔の自分の青春の傷口に觸れてく

るといふのではなしに、今なほその傷口がなまなましく開いてゐて、

そこにまことに凄烈にひびいてくるやうなのであつた。

これほど強く細やかな国語への愛が、この浅ましい混沌と衰弱の時

代に、なほかつ脈々として生き永らへてゐたことを知る驚きでもあ

つた。しかもその愛は胸窄せまき国学者の愛ではない。ジェラルド・

ネルヴァルと李賀長吉を扉のエピグラフに掲げたこの歌集にあ

つて、古い伝統の詩語は、ひろく豊かな新しい感覚に仕へて、多彩

にして柔軟自在な変化を示してゐる。卑語俗語の使用、豪胆な破

調、驚くべき字余りを試みる時さへ、『蟬花』の歌人は決して律動

感覚を失つてゐない。

狂躁の世に生きる浮薄の民われらは、省かへりみて『蟬花』の作者と共

に

杜撰なりしおのれと国の来し方にまた重ねゆく明日の過ち

(暗ければ)

流されて明日はいかなる灯をかがげ国も己れも生きむとするや

(暗ければ)

の嘆を発せざるを得ない。しかし、……このやうな「悲哀」が、こ

のやうな「言語」によつて、ひそかに歌ひ継がれてゆく限り、「美

し国大和やまと」(鎮魂抄)のいのちは、なほ亡び失せることがあるま

い。

——一九六〇年五月——

孤独の心象風景

東 博歌集「蟬花」

結 城 信 一

朗々たるペシミズム

石 川 信 夫

この世に「消極」の神というものもし在りとなれば、歌集「蟬花」の著者はその本山の大僧正たるの資格がありそうである。

感情上の、そして恐らくは行動上のあらゆる冒険、耽溺、狂熱、

のめりこみを自らに禁制し、あるいはそのようなものに陥る機会を

與えそうなるから常にいそいで身を引く。

そしてそのような生きかたをして来た自分をあわれみ、歎き、コ

キおろし、責め虐む。

自己の無力、貧困、痴愚を啜すする……自嘲と自虐。自虐宗の本尊、

タザイ・オサムを礼拝する所以である。

……が、太宰はハメを外した、墮おちた、こわれた。その頽廢の振

幅は大きく、絶望は深かつた。

「蟬花」の著者は墮おちない。少くとも、大して墮おちない。そして

太宰のように墮おち得なかつたことで自らをあわれみ虐むのである。

「蟬花」の歌人は自らの痴愚を嘲あざわらつてゐるが、彼の行動は寧ろ慎

重で賢明であつたのではなかつたか？ 慎重でありすぎ、聰明であ

りすぎたかも知れなかつた。

「蟬花」の空気が聊か息苦しいのはそこから来ている。

だが、ないものねだりはやめよう。
在るがままの東博とその特徴を認識しよう。

消極寺院の大僧正としての御威徳を発見して見よう。

「蟠花」の諸作は、そのすべてを通じて、言葉が遅り抜かれ、言葉使いが正しく、声調が整えられ、その声調は緊張した寧ろリンリッンたる響きを持つている。東博は表現上のクラシシストである。時としてかなり思い切つた口語的発想を敢てしているが、主調は飽くまでもクラシカルで、その基盤の上で時々ヴァリエーションを奏でているのに過ぎない。太宰の散文のスタイルは妙にフワフワしているが、東の短歌のスタイルはキリッとしきしまつてゐる。

しかもそのいずれの作品の中にも自己の感懐を投げこみ、その感懐には生命を吹きこんでいるから、一首一首の腰はシッカリしている。一首一首をヒョイトつまんで卓子の上においても、それらはチャンと真直に立つている。

グニャグニャ歌やポキポキ歌の多い現在の歌壇では稀有の存在であり、それ故に貴重な存在である。グニャグニャ歌やポキポキ歌の氾濫に巻きこまれぬ所に東博の消極的なシンの強さがある。

東博のクラシシズムは……彼の歌は非常に抒情的・自己告白的であるという意味ではローマン主義的なのであるが……表現上のそれであるのに止らないようだ。つまり、彼の「消極」主義という言葉で先に私が言い現わしたその同じものは一般的な抑制の精神であるかも知れないからだ。

そのような精神、そのような心的態度が彼の家系の如何なる遺産

もないし、歌うのでも踊るのでもない。彼がハメを外す所を一度見たいものである、酒において、そして短歌において……。

歌集「蟠花」のこと

堀内民一

瀟洒な歌集「蟠花」をいただき、机上に置いたまま数日、その高雅な装幀や、美しい印刷を見て愉んでゐた。これは近頃めづらしいことで、すぐさま読みつくしなかつた。造本の隅々に東さんの詩を愛する潔癖な性格が及んでゐると思つた。わたくしはただいた一つの果実の機微を、そんなふうにしてながめてゐたのである。しかし本の背の小さな銀色の活字を見て、そのうちによみはじめようと考へてゐたが、なかなかその機が熟して来ない。だんだん憂うつな感じが、ふいに私を襲い、「蟠花」を机上に置いたきり、いつ迄もよまないでゐようかと思つた。だがよみ出したらきつと徹夜して読み切るだらうといふ不思議な予感が、はじめてこの本に接した時のいつはらぬ印象だつた。

東博さんは日本歌人の中でもすぐれた作家として、早くから評価され、第一回日本歌人賞を受けた。なかなかよき印象だつた。しかし一風変わったところがあり、受賞以後つづけて作歌するといつた情熱の型を示さなかつた。そのへんはごく気楽に考へてゐたらしい。文学に縁の少い学問を専攻した東さんは型破りとして桜島の風土を

彼自身の如何なる生い立ちから来ているものか、身の上話をしない仕来りの彼のこゆえ、私には判らないが、それは或いは武士道的なものであつたかも知れない。

東博歌集はある意味で「挫折した欲望」「埋もれた青春」の詠嘆の書だが、その欲望を挫折せしめ、その青春を埋もれしめたものには「戦時調」という外的雰囲気があつたばかりでなく、それを内から抑えたもの挫いたものがあつたのではないか？

戦争が終つて間もなく、遙々と武蔵野の奥まで私を訪ねて来てくれた歌よみの第一号は東博君であつた。

「戦争中に学窓を出て社会に入り、また歌の仲間に入ったものです」というあいさつだつた。

うまく徴兵にひつかからずに来た稀なる青年の一人であつたが、恐らくは戦々競々として恭儉己れを持して来たのちがいがなかつた。そこに僕等昭和初年に青春の日を送り、詩歌の運動を始めたものとのちがいがあつたのちがいがいない。たとえ本来恭儉己れを持つる性格の持主であつたにしても、あの頃のような雰囲気の中であれば、精神的な冒険だけはできたはずである。

東博君がこれからも歌をつくるのか、つくらないのか、一向不明である。どうとも気の向くようにしてくれと申したい所であるが、恐らくは彼はこれまでのような調子で、つまり、如何にも気のないような顔つきをしながら、ポツリポツリと作りつづけるのではないかと思う。

東博は酒を好んでいるが、彼のはいくら飲んでも多弁になるので

一身にうけ文学や芸術に心を酔いてきたらしい。上京した折に、わたくしもしだしぬけに東さんをC書房にたづねることがあつた。

「ちよつと、そのへんでお茶でものみませう」

さう言つて、近くの店へ案内してくれた。そこで何を話すといふこともなく、口重く話す東さんにむきあつてゐるといふ具合で、きはめて無愛想なことばの交換だつたが、さういふ雰囲気で、何かするどく閃くものを時折感じて、その場ではかんたんにあいさつを交して別れてゐた。

日本の文学の歴史上で言ふと、中世の隠遁者たちの気風に西洋の思考や感覚が、ごく自然に溶けあつてゐて、そこに東さん独自の世界が築かれてゐるやうだつた。

はじめの予感的中して、ある夜の十時頃からよみはじめ、翌朝三時近く「蟠花」をゆつくり読み了へた。憂うつな気持を遂に解き放ち得ないでよみ了へたのである。このつきまとつた憂うつは、東さんの詩を探究する心そのままだつたかも知れぬ。しかし私はこの憂うつ感を「蟠花」の詩としての魅力の中心に考へたいので、大切な感銘としてゐる。安東次男氏の跋文を最後によんで、博短歌の近代な魅力の源泉を、垣間見た感じだつた。まことに愉しい跋だつた。

若年の日を傾けて歌ひしも冬に色濃き花にし如かず
日本語といふものをよく身につけた東さんの一首である。この歌に作者の苦々しいロマンが秘められてゐるやうに思ふ。

黄な花は明日といふ日に咲かしてこころ無頼へ追はれゆ
くなり

日本の芸術の中で何が好きですかと問はれたら言下に「無頼の徒

の芸術」です。ねと答へるやうなところが作者にある。ここがやはりわたくしの共感するところでもある。

明日の日は黄な花々も咲くのだからおれ砕けてまた疑ふな
疑ふなじたばたするなきららなすそびやく思ひは明日の日に
待て

彩なして流るるものにそびら向けわが若年の日は傾くよ
愛憎の果ての心の断つべくも踏みしだかれし紫雲英のみだれ
短歌創造の場は又、自己を虐待するプロセスの一つとして、作者は考へてゐた。これは詩人として自明の理だが、現代歌壇の風潮ではこのことが、混乱して、ことばづかひも滅茶苦茶になりもつとも低く平凡な問題として考へられてゐるやうだ。逍空も晩年はひどく短歌形式を虐待して、その底から詩を発想した。われわれは、短歌の伝統を考へ、日本語の使ひ方をよく知り、それぞれの場から、詩としての短歌の発掘をしなければならぬ。東さんは「蟠花」によつて、それを示してゐるところが、何よりのことだ。さういふ意味で安東氏が言つてゐるやうに、歌集「蟠花」は今の歌壇でもつとも美しい果実の一つだといふことは疑ひないところだ。
次に印象に残つた作品を抄出した。

桜島うすくれなるのけむり立ちわが少年の夢の通ひ路

ふるさとに火を噴く山をおきて来つ火を噴くゆゑにかなし
その山

夜に入りて外の面は春の雪しまき心にともすひとつ灯のいろ
持堪へまたくる春が待たるるよ天津橋下陽春水天津橋上繁華子
いつよりかするべも神も失ひてあからさまなる夏陽の光り
桜桃忌また雨にして日もすがら夜すがらわれも繁吹くおもひぞ

「寄物陳思」・「譬喻」・「羈旅」をこめるのは巻十一から。系譜は遙かにくだつて蕉門の「冬の日」・「春の日」、もつとこまかく花の座・月の座・恋の座としても……。まがふかたなくそれほどに「蟠花」の芸術精神は、正統にふかく日本文学の本質に根ざしてゆゑるが、
おほいかづちのとどろと鳴りて過ぎしごとき赤光となりて逝
きしか

言はざれど君はわが師と若きかの酔ひ泣きの日の心の拠処

―冬の章「師よ茂吉よ」

先師と称してはばからなかつたのは、齋藤茂吉ひとりだつたやうである。だからといつてむぎむぎとアララギ派にちかづくどころか、むしろ敵乎としてそびらをむけた情念の切火が、結晶して「蟠花」に驗證をとどめさせた。「赤光」をうけつぐものは「蟠花」にちがひない。といふ意味は茂吉を踏みにつけてゆくアララギ派に、すこぶるいきどほりを発し皆を決してゐたアンタゴニズム（事態拒否）にある。実相観入にすこしも才能は要らない、とかの亜流どもに歪曲されてきたこともながかつたから。ときに芸術まして文学について、知りすぎるほどゆきとどく東博である。それで歌集へくれなるVを主導契機として、もともと前川佐美雄主宰の「日本歌人」の新運動に加つた。したがつて処女歌集「蟠花」の成立は、「日本歌人」に属して以後にかぎつてある。作家理念をうかがふのに直截なものとして、これ以上のことがらはないにちがひない。

その周り尺ほど明き灯に寄せてきのふの悔をまた締めあげる

心いままアルカディアにありと時にわれ夢にアカンサスの丘も

越えにき

若くしてかへりみざりしものいくつ野焼き身を灼く夏陽のゆく
へ
咳入れば險熱きおもひせり聖ならねば大き悔もつ
すがれたるころに添ひて入間野や秋も末なる小手指の道
寒の夜をうたふひとふし西歐の歌なりしかば胸に痛きよ
身のまはりひと色の風吹き流れ音に立つものは知らぬ人声
街すでにユトリロの風景に暮れゆけば視野のかぎりの冬おぼつ
かな

「蟠花」頌

中 塩 清 臣

作品集「蟠花」の組織は四季抄としてわけてあるだけで、制作年次すべて説くところがない。なるほど「扉」には昭和十五年より三十二年におよぶとするすが、つまりこの巻帙あげて時空の経緯を超え、ひたぶるにうたひあげる主題はまつたくひとつ、青春襤褸のあざとひにほかならない。まづときどきの詞彩の關係をばらばらにほぐして、あらためて編輯をよけて四季抄に擬してきたわけである。だがかういふ序列の先蹤ならば、すでに史的にはたしかにもつてゐる。二十一代集はじめ私家集の伝承構造にかよふものであらう。もとより最古典は萬葉集巻八にある。ここに分類して春の雑歌・春の相聞：といふ順になつてゐる。つづいて相聞のうち「正述心緒」

ロマンの花閃かす眩耀にむせび哭き、幻術の赤い風船にのつて碧落に狂ふので、八大地獄のひとつひとつにも墮しつくされ、かほり匂ふメルヘンとも化してゆく。たましひは緋カンナに虫に野鳥にジリキに転身譜をかなで、からだは係恋し傷恨し無限乱離にひき裂かれてゆく。してみると「蟠花」は、アポロのいのち・アドニスのお血・ナルシスの夢……。常住おきふしのいとなみから、きりすてて純粹へただ無垢へ、するどくけがれをうち濯ぐ。だから背信も憤怒も醜辱も痴愚も、とりわけ「美」の姿容にしひられてさへもゐる。それが聯作の方式にかたどられ歌はかたみに映発しあふので、点じられた華麗なシャンデリアのやうにみえる。さらにハイライトのあてかたによつて、きのふはゴブラン織の掛毛氈みたいだし、またけふを艶めく紗羅のあてやかさ。

カムパニアの野は火の色すともわれに昏き暗き七月じりり来る

花一つ胸のうつろに落ちたりと惑はしの如きも信じてねむる

どうしても人間の高貴を生きつづけるとすれば、放蕩族を装ふしかできない現代である。とかく身づくろひしてゐるものほど、真実あざやかに「悪」をたくらみもつ。それで潔廉の「蟠花」は内部発展を、ヴィヨンに倣ひランポオに托しシューベに寄せ太宰にもむすびつけるのである。けれどもどのつまりは茂吉からリルケへ、たどられる路線をもつて方向軸とする。すでにリゴリズム（厳肅主義）をつきぬけ、ストインジズム（禁欲主義）のおもかげさへただよはず。ちまたにさすらふ「聖」の苦渋を浮き彫りにして。ところのみづからをたらぬきとはすためにには韜晦をこころみ、すばやく隠逸のてだてをととのへる條理にもならう。だがひとたび吟誦し諷詠と

なると、この自己演出の二重機能のうらはらに、灯台をみとめ霧をよみ虹をうたふ。

曇天におのれひとりたばかられ恨みのごとき紅き花なる
ここ入りて悲しみの市ここ過ぎて無明凡下のわれに哭く市
阿古屋珠のかたちはちひさくても、大海の精が凝つてなつたものである。海霊(わたつみ)の具象(ものざね)にほかならない。まさにひとしく「蟠花」の一首にも浩瀚の学識と深秘な感覚とが、独自のたえずみで融けあつてゐる。系統発生的に「金葉集」・「詞花集」をへて「千載集」・「新古今集」にいたる文芸座標が、まるで個体発生風に「蟠花」の表現エネルギーを継ぎなす。これから韻律をみぎき語彙をまらぶ錬金術師として、往くさきましかたに瞳をこらす占星家として目を越ひ、つひには昭和芸術の典型をあかしだてることであらう。

東博歌集「蟠花」に寄す

山上伊豆母

「僕の心が僕を押し出す。僕のところが僕からとりのこされる……足でふみつぶされた甲虫の漿液のやうに、僕が僕の身体から流れ出してしまふのだ。そして外皮だけが、いくらか堅固に、その形骸をのこしてゐる。もはや、それに何の意味があるだらうか……」

といふ、素直な人間の感動の純粹さや、

こまごまとわが身のまはり整へてゆふべ灯ともすひとりの宴

(冬の章)

の孤独の陶醉と謳歌。誰にも知られぬ作者のみの城の、ささやか
な、また満足したおごりの境地と、私は見る。
更に、

この夜の闇のはたてであるものは不幸のごとし抱きて嘆かむ
といふ「嘆き」は、実は不幸なげきでなく、作者の稀な燃焼に對
する不安であり、昂揚するが故の懷疑に外ならない。そして、
窓ごしに見やる都会の華やきも握りしめたる手の内ならず
の都会感覚は、作者独自のもので、実は全篇にかう云つた都会の肉
体的把握の歌が、もつと私には欲しかった。

自由なる飛翔は何時かあへなく、翼を休め、昇華せんとするもの
は沈澱してゆく。

濡れてあるおのが奥処をいとはしみ花霧ふ夜は嘆くに似たり
すきのない整つた歌境も、あまりにも短歌的詠嘆調に陥り過ぎてあ
るのではないか。昂揚したときの作者が使ふ言葉の無雑作な新しさ
に比べ、沈潜せる場合の練れてゐながら手垢のついた用語が気にな
るのである。「いとほしみ」「花霧ふ」「嘆くに似たり」真面目な
作者の意図とは別に、短歌的常套語だけが反逆して嘲笑してゐる
喜悲劇。

夏すでに老いゆくときをつかのまも眼を凝らす何のいらだち
「何のいらだち」かは作者がよく知つてゐる。知つてゐて態とかう
云ふ言ひ方をするのが、私は同感できない。一步誤れば、それを知ら
ないでポーズだけとる少女歌人と同一視される危険をはらむから

と、リルケは暗やみの中で嘆く。しかもリルケの「もの」を見る眼
だけはつぶされずに、又甲虫のやうに四六時中開かれてゐて、ぢか
に「もの」の生命にふれ、「新詩集」となつて結晶したのだ。

リルケを愛する「蟠花」の作者は現代人なるがゆゑに、よりカプ
カ的な絶望や虚無や分裂に悩まされる。現代メカニズムにおける人
間喪失の危険が叫ばれて既に久しいのに、「ヨーロッパは没落し
て」遠いのに、破壊と苦渋の文学は横行して更に、ビートの行動に
よる「ことば」を生んだ。マンフォードは「機械を人間性に再適応
させよ」と叫ぶけれど、組織に適応しようとする人間ばかりが多く
ては、伊藤整の「既成道徳や人間像に對する疑問を核としてものを
考へ」ることが、いよいよ困難となり、逆に文学の言葉が乏しくな
つて政治の言葉がはびこり、根本的に盲目性が支配する時代を将来
するかのやうである。

「蟠花」の作者は、これを脱するのに、極端な方法、たとへばア
ンチ・ロマン派のやうに「神の眼」を否定するとか、或はビートの
やうに「行動する」のを撰ばないで、リルケの明澄とカフカの絶望
の間を、あたかも作者の愛するルイ・シュエウエの如く「一つの
顔」をもつて漂泊うたのだ、と私には思へる。

だから、全歌集の一つの印象は

激しく昂ぶり心とはかな心あひとよもして明日の身仕度

(歲月)

といふ告白に、凝縮されてゐるやうだ。羽ばたくやうに昂揚される
ものと、沈潜し降下し退廃してゆくものと、その二つの断層は作者
にとつて痛ましい。その前者の印象を受けるものは、

何故に人はひとりを待つことを知りそめし日の心の顔へ

だ。

死にてなほ君を鞭うつ声絶えず魂低きらの醜のだみごゑ
下の句の表現、どのやうな理由からでも他人に對するかかる観方
は、人間疎外に通じその喪失感ば作者自体に戻つて来ないだらう
か。むしろ作者が起ち上つて、憎むべきものを鞭うつべく行動した
ら……。

激揚と沈潜は誰にでもあることで、その二つのテーゼの止揚によ
つてこそ、発展があることは常識であるが、蟠花の作者にとつて二
つの要素の接触の度合、二種の絵具の雑合せの溶解の仕方、絵具
でも、益々透明に鮮烈に輝くものと、どうしても雜らずに濁濁し不
鮮明になるものがあるやうに、

何の夢何の彩かもいさどりてある夜羽撃かすも快樂に遠し

(歲月)

の如く溶解度の高い、抑制された暗い結晶をもたらすものが生れる
反面、

いつの日かわれの心に鳴り響く歌ひとつあれよ暮れてゆく春
となげく、結晶せんとしならず、フラスコの中を浮遊してゐる分
子粒の不安を示す弱さも見逃すことはできない。その弱さは遂に
女との逢ひを早々に切り上げてシュエウエ見に来しむかし浅草
のわびしさに通じるのではないか。

四季を通じ、リルケを通じ、シュエウエを通じ、激しく暗い戦争
を通じ、又闘病を通じて、この人の世界はひろく多彩でロマンに富
み、現代のメカニズムの中で息あへいでゐる。にもかかはらず、そ
の呼吸が体温がちかに読者に突き刺さつて来る力が、どちらかと云
へば弱いと感じられるのは何故だらう。茂吉に心酔したといふ気持

はよくわかるけれども、既成の短歌的抒情のワクに溺れることは作者の稟質を發揮するのを妨げさへする。

誰にもよく理解りしかも貴重なテーマを執へて括まつた調子の歌である、

生涯のわがあやまちは言はざれど亡びしものは美しかりき
でさへも、やはり少し私是不満である。なぜ「言はざれど」と云はねばならないか。「美しかりき」の流れ。勿論かう云つた調子は自身も屢々無意識に好んで用ひ、自己陶醉し然るのち倦まることが少くない。

抑制の文学と云はれる短歌であつても、過度の抑制は髪一重で萎縮に落ちるのではないか。短歌といふ日本伝統の短詩型が、ささやかでも現代文学のなかに生き延びてゆくためには、社会と人間との分裂離反に苦惱しながら虚無の恐怖に脅かされながらもカフカが、人間を「もの」として喚びますことによつて、遂に人間の根源的条件を再発見して行つたやうに、すぐれた文学を生み出さうとするものは、「お定まりの日常課程から去ら」(マンフォード)ねばならない。

ましてや過去の、狭いあまりにも狭い一歌人の歌境のみに執はれてゐる場合があつたとしたら、それは生きのびて来た短歌の伝統に對する輕視であり、その歌人に対する冒瀆であり、自己の文学に對する卑屈でありさへしよう。

蟠花の作者東博氏のもつ鋭い感覚と真摯な造り型と広い世界と豊富な人生体験とをもつてしては、今後において、抑制はむしろ必要なのではないか。

詩人の慟哭

大伴道子

医学が進歩するにつれて、人体のあらゆる臓器の手術が可能になりつつある現在、さうなればなる程、人体の構造の精巧微妙さは益人智のはかり難いものがあり、研究すればする程に只々驚歎に値するものばかりであるといふ。誠に生物とは偉大なる神の作品であり永遠の神秘であらう。

詩人はその神の心に触れる瞬間をもつものであり、大自然の声をきく事の出来るものである。元來詩は孤絶の深奥に棲むものであつて、流るる溪流のささやきの如く、浮んでは消ゆる雲の如く、草間がくれに咲いてしほむ花であり、音なく散る落葉の紅である。

この度東氏の歌集蟠花が上梓された事はお喜びに耐えない。氏の作品をとほして、私は氏のうづまく詩情と日本文学の中に流れて来たひと筋の寂寥感に触れ、詩本来の孤独の中に、氏のにこりなき魂の慟哭をきく。自己をみつめ孤独を愛し、ごまかす事のない痛々しいまでの魂の独白が、或る時は故郷の火を噴く山に、或時はジント響く巷の夜に、又或時は異国の詩人のうたに、はげしい憧れをよぶ。すがりつく思ひでマルテの手記に読みふける詩人の心は、いか何干哩を心で歩み無言にパリの巷の闇にとけこんでゆく。それはすでに、パリの裏街を彷徨ふ東氏であり、場末のテラスで黒いカッフェを啜む孤独な東洋の詩人の姿を切なく思はせる。

美しい歌である。にこりなき如月の朝の風にためらはず物を言へと言はれた如く、喜びが、憧れの目が、きらきらと澄む風の心をたしかめて居る。

明日はまたいかなる血をか吸ひゆかむ個を超えぬの進みゆく道光なき日の祖国の行末を憂ふ詩人のふかいかなしみが見える。真の日本の進みゆく道はいまもなほ示されて居ない。混沌の中に立つて明日を憂ふるもの、日本には日本の道がある。その真の日本の道を誰が示すのだらうか。

葛城の神も哭きませ美し国大和亡びしこの日の涙

これこそひとしく日本人の涙であり、実朝の血である。悔んでも悔み切れない慎りとかなしみがひしひしと胸底をうつつて来る。この亡びし美し国に、美し詩人よ亡びる勿れと叫びたいやうな歌である。

時折歌会でお目に懸る氏は黙し勝ちで、人生の起伏の中でいつか言葉は失はれてしまつたものか。ひたすら沈潜してゆかれるのも一つには肉体的なものがあつたのであらう。健康を恢復されて、益々詩の本道を究めらるる事を期待して、この拙ない筆を擱く。

歌集「蟠花」に

山中智恵子

夕虹のあな清しけば眼を拭ひ熱き祈念の燃え立つ日なり
この一首にも私は深い感銘を受けた。これはすでに神の心であり、一切を拭ひ去つた至上の目である。強い澄明な高度な音楽の序曲に入る瞬間を思はせる一首である。今の政治する人に一時でもかうした魂の美しさに徹する瞬間があつたなら、この国の政治もつと立派に為されて居るであらう。

ためらはずものを言へかも如月のあした冴え澄む風吹きとほる

▲蟠花Vについて何か書くやうにとのお手紙をいただいてから、

二カ月になります。

心萎えたときも知らに吐く息のひと夜凍りて明けのつゆじも

身のまはりひと色の風吹き流れ音に立つものは知らぬ人声

このやうな歌群について何が申上げられるでせうか。二首の秀歌を掲げて糸口を引出さうとするのですが、益々心重くなるばかりです。

暁涼暮涼樹如蓋

千山濃緑生雲外

依微香雨青氛氤

膩葉蟠花照曲門

金塘閑水搖碧漪

老景沈重無驚飛

墮紅殘萼暗參差

(李賀 四月)

歌集の扉に置かれた李賀の詩は、いみじくも作品の世界を語つてゐるのですから。

△明けのつゆじも▽△墮紅殘萼▽と繰返しつぶやきながら、△蟠花▽の沈痛な四季をめぐるのは、私自身の輪をめぐることであり辛いことでした。

この歌集は、作歌年代を外してただ春夏秋冬の章に分けられてゐます。まことに、短歌にとつて過ぎゆく曆以上の何物があるのではせう。

日々の心情のイメージの集積が、一瞬脈絡を断つて木に花に季節の翳りを帯びて映発する——短歌とはつひにこれ以上のものでないやうに思へるのです。

△蟠花▽には、繁雑な心理の綾を歌つたものは一首もないと言へませう。

の挽歌を生ませてしまひました。

戦の日に若かつたこと、そして幼くはなかつたことが、どれほど無惨なことか。△蟠花▽の根底にある傷の深さを、立戻つて四季の章のなかにまた読みとれるのです。

無惨の上に立つて、

心いままアルカディアにありと時にわれ夢にアカンサスの丘も越えにき

と歌ふのは、青春時の漠々とした憧憬ではなくて、跋の安東次男氏のお言葉を借りれば、「脆い人間が堅固なものを見る態度」でせう。

悲しみと静けさと明るさにみちた、形そのもののなかに魂を宿すこと、註釈なしに肉そのものが心の姿となる作品の世界を求めていらつしやると言つてはいけないでせうか。魂の生地が深い感覚の層を通して透いて見えることをこそ。

この歌集のもう一筋の底流は、含羞のところです。「境涯の歌」「近代恋慕調」といふ小題の附し方にもその片鱗があらはれてゐますが、誤解を怖れずと言へば、含羞——隠者の心——東洋的ダンディズムがあります。

疎み咲く龍胆ひとつ哀れなれどあはれがられるは不幸のはじめ

七八日花に對ひて沈黙すつばらつばらのわがおもひごと

この夜の闇のはたてにあるものは不幸の如し抱きて喚かむ

汗あへて苦しき息も知らゆなとわが目ばかりに遠き街の灯
せぐくまり師走の風にせめられて唸囁ふおもひ人に知らゆな

現代の短歌が丈低くなつたのは、心情と心理とを混同したところにひとつの因があるのではないかと思はれます。

一首の作品から作家の心理を様々に分析してみせるのは批評家の領域であつて、歌そのものは、分割出来ない心情が、或る時、物(自然といつても曆といつてもいいのですが)の中に真直に立つとき、確かなしらべとなるやうです。

掌に紅にじませてけふの日のわがかなしみは音たててあつ
五月盡島山かすむふるさとに帰り来りぬ心弱りて

卷舒いまは風に任せよ若からぬ身をとよもして鳴るは空鳴り
身に過ぎし何も奢りは持たなくに燈を暗うする夜々の度み
人が皆死へ急ぐ街と記せしをその死の街を正目にみたり
背信を冬樹も吾に許せかし畦伝ひゆくこよひまた雪

後代によつて鬼才絶と讃へられた唐の李賀は、二十七才で夭折しました。二十七才の東博にもひとつの死——敗戦がありました。

そのかたみとして卷末に△鎮魂抄▽として戦争歌集が添へられてゐます。

アリュージャン霧はとぎせど海波越えあひとよむがにその声きこ
言に出でて語るもあへずひた急ぐ清若きおもひ開き見せてよ

四季の章の歌に比べると、挽歌といふ内容にもかかわらず、朗々と澄んでゐて、それは終戦の夏の不思議に晴れた日々の空に似てゐて私を愕然とさせます。そして太宰治の「トカトントン」が蘇ります、その太宰もまた、

桜桃忌また雨にして日もすがら夜すがらわれも繁吹くおもひぞ

眠を清めて寝まるうつしみに薄黄の花も匂ふ夜頃ぞ
持堪へまたくる春が待たるるよ天津橋下陽春水天津橋上繁華子

ところで発祥地は不明ですが東プシといふ伝説があります。このフシについては、古雅で格調正しい措辞と、ほとんどの作品にみられる結句の軽さにあるのではないかと、私なりに考へてゐます。

成功した場合は余韻婉々、間違へばはぐらかしに転ずるフシの妙味、つまり間がよすぎるといふわけです。

すでにしてころ専らの時過ぎぬ秋よ春よとみな退きつつ
たづさへて背の光ははばかりて心すかし見るも諸行は無常
などは悪い方の例です。

ともあれ、東プシは、天正・文禄の頃堺の隆達が一節切の一番に托して創めた小歌、隆達節を思はせます。悲しみを底に沈めて流麗でありながら、宙にあがつてその糸の見えない凧のやうな隆達詞章の虚しさに通ひます。

あなたはいつか「コトバのミダレはそれココロのミダレか」とお書きになりました。

△蟠花▽はその出発から完成した形で最後まで同じ調子を保つてゐます。このやうな歌集を出してしまつた後、どんな歌をお歌ひになるのか、私は少し不安になります。先に挙げた一首八音に立つものは知らぬ人声▽に戻る時、やはり△蟠花▽の歌人は、遠くからいくたびも自己へ還りながら新しい成熟を遂げられるだらうと思ふのです。

東さんの歌集「蟠花」のこと

吉岡実

今から五年前、ぼくの詩集「静物」について、東さんが心のこもった感想を書いてくれた。こんどは、ぼくが「蟠花」の感想を書くことになった。批評がましいことはとてもできないので、思いつくままをのべよう。東さんの二十年の精神の歴史でもあるこの処女歌集「蟠花」は哀傷詩集というのがふさわしい。型は短歌であるが、一首一首をぬきだしてみるよりも全巻四六五首を均齊のとれた美しい一大挽歌として読むべきではないだろうか。

彩^{あや}なして流るるものにそびら向けわが若年の日は傾^{かたむ}くよ

愛憎の果ての心の断つべくも踏みしだかれし紫雲^{げんげ}英のみだれ

ふるさとに火を噴く山をおきて来つ火を噴くゆゑにかなしその山

追ひつめてわが生きの世を歎かへば心に触るる花ひとつなし

ちよつとぬきだしてみても、アララギ派の実相観入的な歌風から遠い。別のことで云えたいへん観念的な歌に思える。しかし妙

歌集「蟠花」

石塚友二

東博氏が、歌壇ではどのやうな位置を占め、どのやうな声価を有する歌人であるかといふやうな点に就いて、私は何も知らない。しかし、私は、氏から贈られた歌集「蟠花」一巻を繙くことに依つて、その詩品の並並ならぬ高さに触れ得た心地がした。専門歌人の諸氏の立場からは異論があらうとも、私は東博氏の作家的資質の非凡さを信じて疑はない。

咲きつぎていくか保たぬ花なればゆふかたまけてまたも見むとす

濡^ぬれてあるおのが奥^{おく}処^かをいとほしみ花露^{はなつゆ}ふ夜は嘆^{なげ}くに似たり
このやうな歌を、前時代の抒情歌と呼び去ることも、多分は容易であらうと思はれる。情緒よりも思想を、詠嘆よりも論理を、幻想よりも実像を、そしてより抽象的に、といふ風な傾向は、ひとり絵画の世界のみに限らず、芸術一般に認められつつある今日の潮流のやうに考へられることからすれば、短歌の世界も、恐らくその例外ではあり得まいが、単なる一読者に過ぎない私等には、抒情が純粹であればあるほど、美しく、また微妙に感取されもするのである。

もろもろのおもひつめたる一念もかへりみすれば十年^{とせ}過ぎたり

に空々しくないのは心の影が純粹に流れているからだろう。ぼくも少年時に幾つか歌をつくつたが、単純な叙景歌しかよめなかつた。それで幻想的な世界を求めて詩へ移つたのだが、東さんはむしろ幻想を求めず、日常の世俗な身辺のリアリティを心理的に捉えて、みみちちくなく、格調たかい、結晶した歌をつくり上げている。ぼくたちの知つている、すべてにきびしい東さんの心の奥に、煩悩の人、哀傷の詩人の一面が窺^{うかが}われてうれしい。

好きな歌を少し抄^あしてみる。

女との逢ひを早々に切り上げてシューウエ見に來しむかし浅草

みちのくのいはでしのぶ忍ぶ恋石に刻めりみちのくびとは

夏に向く照り盛んなる青若葉生^{あは}きの喚^{あは}びの時過ぎにけり

もろもろの女人のいのち眼交^{まなまひ}に燃えていますがに濃きくれなぬや

きのふけふ冬もすゑなる物思ひ悔しきことをまた一つせし
(百濟観音)

老杉^{らうさん}の上透^すく冬日^{ふゆ}乏しけれあまつさへわれの額^{ぬか}に届かず

巻末に戦争歌集を収めた東さんの自信、良識におどろく。どの歌を見ても胸をうたれる。東さんが自己の精神を偽らず、体験を大切にする天性の詩人であることを証している。

つたなくて過ぎしと思へ十年をかへりみすれば落魄^{らくはく}の歌
十年のながき戦^{いくさ}にわが若^{わか}さむざんやな夢のひとつあまざす

これらの歌を、消極的で古風だと評することも評者の勝手といふものであらうが、私にはかなしく、滑らかに響いて来るものがある。そして、この滑らかに快よいのは、一に澄明な韻律の流れにあると思はれる。

夜に入りて外^との面^{おも}は春の雪しまき心にともすひとつ灯のいろ
ティー・ルームあたたかけれど切なくて餓^うゑの心を窓より放つ
いざたなく幾日をこころ荒ませて夜深く辿るライナア・マリー
ア・リルケ

またしても思ひ知りたる身の業^ごのわれを焼くなり焼かせぬるなり
過去^{すきこし}も大方は暗く垂れこめて何を頼みの明日が来るならむ
いつよりか境涯^{きょうがい}の歌作りそむ照る日すくなき境涯の歌

近來、俳句の世界でも、私小説的な作品等といふ批評用語がいかに尤もらしく使用されてゐるやうであるが、いつたい、私小説的でない俳句などといふものが何処にあるといふのであらう。風景を叙すにしろ、天文人事を詠ずるにしろ、「私」のゐない俳句などある筈がない。東氏の「境涯の歌」も同じ意味で玩賞に値するのである。

頼めりしわが世の星の一つ墜ちおちてのちの無量のなげき
君^{きみ}逝^しきし玉川^{たまがは}べりを徘徊^{もたほ}りていつち行かめとせん術しらす
きみが死^しの跡^{あと}処^{ところ}いつこと覚めゆきて渦^{うず}なす水に視入るしほしば
君^{きみ}にかけし望^{のぞ}み空しく若^{わか}きらの渦^{うず}潮^{しほ}なせる歎^{なげ}きこゑ聴^きけ
死^しにてなほ君^{きみ}を鞭^{むち}うつ声^{こゑ}絶^たえず魂^{たま}低^ひきらの醜^{みにく}いのみごゑ

いづかたに向きてなげかむうなじ垂れわが浴びて立つ虹はなな
いろ

夕虹のあな清しければ眼を拭ひ熱き祈念の燃え立つ日なり

「太宰治に捧ぐる挽歌」と題する一連の作品である。幾らか息の詰
つた感じのされるのも、どれほど太宰に寄せる情の篤かつたかの、
その気持の端的な現れと見てよからう。

こよなくも吾が愛せしルイ・シューヴェ海のあなたに死ににけ
るはや

「北ホテル」わが愛でにける翳深きその演技今も忘れえぬもの
名優の今を名残りの「北ホテル」いづこの館にも行きて又見む
ギヤパンよしジャン・ルイ・パロウそれもよしシューヴェに如
かず心通ふもの

女との逢ひを早々に切り上げてシューヴェ見に来しむかし浅草
浅草の六区の夜にまぎれ入りシューヴェ好みと酒が飲みたし
身につかぬ無頼めきたる顔もしぬシューヴェがシネマはねしそ
の夜

二十歳まりいくつを出でぬ年にしてシューヴェめきたる仕種愛
しぬ

「ルイ・シューヴェ」と題する連作である。ここにも作者の顔の源
泉の一部を汲み取り得るであらう。

いくたびか心をそこに任せしとまた立ち返る夜は「マルテの手
記」

オテル・ピロンに孤独にてリルケ在りし日のその巴里の空その
風の色

殉教と受苦が立ちこめし巴里なるオテル・ピロンの窓の灯が

しく、それだけに茂吉翁の死に強い衝激を覚えたのもあらう。

(俳句誌「鶴」五月号より転載)

ひとりの宴

久保田正文

咲きつぎていくか保たぬ花なればゆふかたまけてまたも見むと
す

濡れてあるおのが奥処をいとほしみ花霧ふ夜は嘆くに似たり

敗れしは戦のみかはくぐまりて夏も終りの汗しどろなり

想はねどまたかへりくるおもかげのわが目に沁みて遠白き日や
無為にしてけふの在処のかなしければ咳きにつついねむとぞする

こまごまとわが身のまはり整へてゆふべ灯ともすひとりの宴

歌集「蟠花」は徹頭徹尾悲傷詠歎のしらべである。作者は一九一
八年うまれというから、すでに四〇歳をこえているが、この歌集に
あつめたのは一九四〇年から五七年までのうた四六五首である。つ
まり、作者はその青春を、このように凍みつくようなきびしいペシ
ミズムをもつてうたいつづけたというわけである。それだから、あ
る意味でこの集には、「和歌」が現代において現象するひとつの極
限が暗示されているごとくでもある。

(「図書新聞」より転載)

十年前こらへかねては泣きし書また見る東京の雨の夜すがら
容赦なく雨が眼に滲むと書きしふみ見つつ苦しむここは東京
偉大なる失意の人の眼に滲むは巴里黄昏れて仮借なき雨
人がみな死へ急ぐ街と記せしをその死の街を正目に見たし
サンジャック街ゆきてもどりにて記せしは巴里の夏の體えたる句
ひ

この一連は「ライナア・マリア・リルケ」の題の作品である。こ
こにはつきりと東氏の歌の故郷が明示せられた、さう見ることが出
来さうである。

巨き星今し墜つると泣きの眼に名残りの雪は白々として

白々と雪の消のこる朝にして大き悲しみ聞きにけるかも

天地にそのかなしみは透るべし根雪の下草萌ゆる朝

蔵王峰に雪白からむ荒らけきみたま還ります朝はみやこべも雪
かりがねの天ゆくときはきみが雲最上川辺に隠らふらむか

おほいかづちのとどろと鳴りて過ぎしごときみ赤光となりて逝
きしか

残雪の眼に痛きとき熱きあつき言ひがたきおもひは君にかかは
る

年久のかの係恋に以たりしよ一目欲りせり会ひたかりけり
言はざれど君はわが師と若きかの酔ひ泣きの日の心の拠処

係恋のはた直情の歌あまたわが二十年の養ひなりき

「師よ茂吉よ」の題下に詠まれた二十首の連作の諸歌で、声調は
茂吉の「死に給ふ母」を思はせるばかり沈痛なものがある。東氏は
歌で嘆じてゐる如く、生前の茂吉には一度も会ふことがなかつたら

悲しいかな蟠花

田中克己

昭和十五年から三十二年まで、十八年間の歌といふのに、まづ驚
かされるが、読みもてゆけば、この十八年間を通じて塗られる色は
一色である。浅野晃氏はこれを気の毒がられて、もつと明るい色
を、といはれたのを記憶するが、悲歌ごのみの私は、この歌集の歌
全部に打たれ同感した。共感といつた方がよいかもしれない。歌の
ならべ方に著者の計画があつて、春夏秋冬と四季に分ち、作つた順
ではなかつたのを感じがずに、読み了へたあと教へられたが、私の
この失敗もその渾然と一色に塗られたせみかもしれないと負け惜し
みでなく思ふ。

しかしこの一途の色の理由は何であらう。「苛酷き月日」だつた
らうか。「もろもろのおもひつめた」一念のせみだつたらうか。忍
辱、落魄、たばかられ、これらの理由らしい単語が歌集の初めの方
に見えて、私もはじめはそれにこだはつた。しかしよく考へて
みれば、この作者はたばかられるには、賢こすぎるのだ。忍辱、落
魄、みなうそであらう。うそといふことばがいやがられるなら、虚
構としてもよい。そしてこの虚構以外には文学はないのだ。真実一
路、リアリズム、書いてごらん、作つてごらん。そんなものは文学
の世界にはあり得ない。みな出来ない相談なのだ。

咲きつぎていくか保たぬ花なればゆふかたまけてまたも見む
とす
十年のながき戦にわが若さむざんやな夢のひとつあまきさす
(花)

生涯のわがあやまちは言はざれど亡びしものは美しかりき
(十年)

石くれの如きわが身と思ひなすかかるゆふべも空は茜す
(海山のおもひ)

朝々を髪ぬけの抜毛ぬけの散りほひて一日ひとひの幸もはかりがたなし
(石くれの如き)

吹きしまくこの雪の行方知らねば渴く心もとどめがたなし
(春の吹雪)

亡命の歌の如くにいつもいつも吾を吹きぬけてゆくあてど
き風
窓越しに見やる都会の華やぎも握りしめたる手の内ならず
か

人ひとり去らしめしばかりの悲しみかなべての別離わかれをわれは
して来し
(近代恋慕調)

石を起すおもひに生きて生き残りくやしきことは数へきれな
く
(旅立ち)

つたなくて過ぎしと思へうつそみのうなじは風に吹き曝され
つ
(夜の度み)

われここに萬の懺悔えんげをなすともてらひに似たるうそ寒さな
り
(こそ雪)

暗がりくらがりを暗がりばかりを覚めゆけば生身なまみはいつか失せし如く
に
(街の谷)

に夕靄空が照り映えるといふのだ。逃避や代置の行爲のない本心の
嘆きが美しいのだ。いつか髪ぬけの抜毛ぬけが多くなつたことにも、この作
者の純な瞳は目を凝らす。凝らした目に吹きしまく雪が痛いやうに
滲みる。吹きぬける風は行方もわからぬ。永い都会生活も何ひとつ
手中に得たものもない。——かうしたすべての認識も、懺悔といふ
にはたらひに似た心寒さだといふのだ。暗がり暗がりともめて生
きてきた身には、去にし月日が重たいといふのだ。あれやこれや思ひ
返してみるのに、この世に生きるといふのは小突かれるといふこと
の別称にしか過ぎぬのか、それを思ふと眠られぬと歎くのだ。——
これ等の歌は、純粹に人生を生きようとした真摯な生活者の生ま
の声だ。この生活者にとつては、恐らく、人びとが何を血眼に世の
名利を欲して足掻くのか、何を競つて人生の虚飾を愉しむのか、そん
なことには到底理解も納得も及ぶまい。日おのれを押しひしがう
とかかる忌まはしい現実を肩に負ふことだけで精一杯なのだから。
戦後に限らぬが、殊に戦後といふ現実と世相は、この生真面目な生
活者にのしかかつて、この真面目な人間から余裕と笑ひを奪ひ取つ
てしまつたかのやうでもある。良心を全うするとは斯様に苛酷なわ
ざなのだ。自分の生き方を誤魔化さうとしないまともな人間、何等
かの意味で現実をはぐらかさうとかからなかつた愚直な人間であつ
たら、誰しも東氏のやうに傷つかずにはをれない筈だ。現代といふ
のは其れ程氣違ひ染みた時代なのだ。東氏の歌や生き方が自虐的嗜
好としか見えない人間は、みんな現実をまともには生きずに、どこ
かで操作し辻褄を合はせるといふ生活技術を心得てゐるに違ひない
のである。まともには生きないといふ悲しみが歌の動機になつてゐる
ことも、大多数の人間にとつて伴りない真実とも云へるのだから、

抱きしめて証もとむるしぐささへ人間どちはかなしみてする
草の葉に露置くころを立ちてゆくころ重けれど人かばひつ
つ
言問の橋を渡ればよこさまに陽は江東の空に赤々 (白い夢)

何ひとつ才なき身とぞ悔しけばひとりうたげの歎き歌なす
こ世ならぬもの恋ひて来し悔まねど去にし月日が身を重く
する (ひとりうたげ)

また新しき戦の噂うわさきく街に心みじめに年逝かんとす (燈影)

老杉の上透すく冬日ふゆ乏しけれあまつさへわれの額ぬかに届かず (醜辱)

どぶ泥どぶどろに浮ぶ芥あかたが悲しけれ照り翳かげする陽もかなしけれ (鎌倉円覚寺)

聖降誕祭間せいじやうたんさいま近き一夜みぞれて病やむわれさへや華やぐものを
わが夜々を眠らせぬもの何ならむ世に生きてくやしこつかれ
につつ (聖降誕祭)

咲く花の長つつきしてきほふのは幾日でもないから、日に何度で
も見て目に楽しんだ後とでも再び繰返して見ようといふのだ。花の
いのちは其ういふものだからと、生ま合点しての傍看も出来なけれ
ば、花の美しさなど当てにしないといふ自己の強さに自負と恃みを
賭ける決断も能うしない人間の、ありのままの肉声だ。十年の徒な
戦に消費し果てたおのが若さを虚心に省みて「むざんやな」と謡曲
「悪源太」の声を藉りて歎声なげきを放つのだ。生涯のあやまちはあやま
ちとして、それも避けられぬ人生として身に引受けるから美しいの
だ。人間から石くれの列に脱落したと正直にみつづからを願省する瞳

その方の人生態度を一概に否むわけにもいかぬのだけれども、東氏
のやうにまともには生きるために傷つきひしがれた人間もあることを
見喪つてはならないのだ。東氏の歌は、さうした忌まはしい現実を
まともには引き受けた人間の真率の声として評価すべきなのである。
むしろ生活技術などと云つた小賢しい処世術を自分から破棄し、素
手で生き、素手の故にもみしたに押し挫かれた人間の記録として、こ
の歌集は読まるべきものである。「蟠花」が稀有の歌集であるのは、
実にその点に由ると信ずる。
しかし、現実とこれをまともには身に負ふ人間との関係は、決して
死者と生者との関係のやうに通ずる道が断たれてゐるのではない。
否定したりすることは正しくない。人間の意欲を抹殺することは、
人間を石くれ以下におとしめるものだ。意欲それ自体を救ひ、石く
れをも人間に引き上げる、内なる熱情を燃やさなければ、生きるとい
ふ証しが立てられぬからだ。沙を灼き、現実を真つ赤に焙立たせ
る一瞬の熱情が、人間を事物や事物の機構から救ひ上げるからであ
る。しかし、東氏はいつまでも押しひしがれてゐるのではない。そ
の内なる熱源の所在を夙もとに捜り得て、それに点火する機会を口を
食ひ縛り乍ら待つてゐるのだ。
春くれば今ひとたびを燃え立てとおとろへ著しるき身を起さしむ
(海山のおもひ)
ふるさとに火を噴く山をおきて来つ火を噴くゆゑにかなしそ
の山 (火を噴く山)
身ぬち深くありてしばしを奮ふるひ立たしむ炎の如き言ひがたき
かも (裸身)

淡々といくばくかわれにも見えそむる光の如き信ぜむとする
(つゆじも)

醜辱のひとりと己れ蔑めどきげすまるれば抗はむとする
(醜辱)

むぎむぎとおのが一生は蔑すとも胸門突き上げて言ひ難きも
(むぎむぎとおのが)

の
過ちも負目も愆もみな忘れいさぎよき日の生きざまが欲し
(修羅)

これら数首の歌は、そのやうな点火の一時を待ちのぞむ作者の決意の披瀝として、貴いのである。そして、またこの歌集『蟠花』を纏めてみづからへの道標を樹ちたてた意義として、いさぎよいのである。東氏は、この歌集を世に出すことに由つて、みづからの人生態度に一つの当為を課した。忌まはしい現実を嘗て一度びもいなすことがなかつた真摯な生活者が、盲滅法な別次元の現実創造にも走らなかつた考へ深い生活者が、われとみづからの決意によつて身ぬち深くありて奮ひ立たしむ炎の如き言ひがたき何かを、新たに身に負ふと歌つたのである。これこそが、この歌集のモティーフであり、東氏の今後の全生活の基本テーマなのである。

歌集『蟠花』を再読し三読しつつ、同世代の人間の一人として、私はつひに何度か涙してしまつた。短歌といふ文学が遊戯や名利の道具に墮してしまつたこんにち、このささやかな文学形式に由つて自己の人生の生き方を顧省し、亦た斯くあるべしと倫理的決意をさへ明らかにした歌集が与へられたことは、真に愕きであると同時に襟を正さしめるものであつた。まさに、現代短歌の稀有の所産であると言ふべきなのである。

歌集「蟠花」

この歌集は、昭和十五年から三十二年までの長年月の間に詠んだ中から、四六五首を収めている。

昭和十年代の、文学青年であつた著者は、日本浪漫派の影響を強く受けているように見える。

花ひとつ咲かしめざりき少年のわが日を呼ぶも春のおぼろや明日は何か楽しみ一つある如く願ひけふの暗きに堪へつといつたように、啄木、牧水の感化に出発し、

ここ入りて悲しみの市ここ過ぎて無凡下のわれに哭く市と、名作「道化の華」などの太宰治に、もつとも傾倒しているようである。歌の完成度からは決して高度のものとはいえないようだが、悲壯感に満ちた、日本の劇的な時代に青春を送りながら、痛いような少年の純粹さを持ち続けて、歌い続けた感動は読む人の胸をうつ。なお著者は、鹿児島に關係のある人のように思われる。桜島の連作十一首の中に次のような歌がある。

ふるさとに帰らむねがひの繁くして薩摩島山まなかひに頭つふるさとに火を噴く山をおきて来つ火を噴くゆゑにかなしその山

〔南日本新聞〕より転載



編輯後記

○今月も大変遅れて、会員の皆様にはまことに申し訳がありません。「東京の発行所は一体何をしているか。」と御叱責の方もありません。何かと不都合のことが出来て困りました。何卒悪しからず御了承を願います。

(古川政記)

○今年の夏行は地理的に不便であり、又台風の方角にも当つていたため懸念されていましたが、七十余名集り、かえつてお天気にも恵まれ盛会でした。近く特輯号を出す筈です。例によつて地元の方は大変なお骨折でした。十月九日東京は前川先生を迎えて、郊外の保谷町「武蔵野」で歌会をしました。その折の先生のお話から次のことを皆で注意したいと思ひます。

- 一、投稿歌は十五首以内
- 五十首位送られる人もあつて意欲は喜ばしいが自選して自信作を送られたら必ず開封のこと。

- 一、先生を訪問する方は特別の用件でない限り毎月第一日曜日、終日にされたくその他の日は遠慮されたいこと。
- 一、前川先生がしてをられた添削は今後は別掲規約通り四名が当ることになつたからそれぞれの希望者に送られたい。
- 一、遅刊をとり戻すため次号とその次二号は作品だけで出すこと。
- 一、同人の作品の集りが悪いので本号着次第送稿して頂きたい。

以上のようなことです。よろしくお願ひいたします。

(宮崎智恵)

日本歌人規約抄

- 一、日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
- 一、日本歌人は会員と同人と維持同人から成る。会員は一ヶ月八十円、同人は二百円それぞれ三ヶ月分以上を前納のこと。
- 一、入会の場合には前記会費と共に入会金百円及び略歴を添へること。
- 一、投稿歌数は十首前後、一首を二十七字以内に楷書で大判四百字詰原稿用紙に認め最初の行に姓名、また末尾に住氏名を明記すること。
- 一、原稿用紙はなるべく日本歌人制定のもの

を使用されたし。日本歌人発行宛申込むこと。

- 一、原稿は毎月二十日締切(翌々月号に発表)奈良日本歌人社宛送附。入会及び会費その他は東京日本歌人発行所宛のこと。
- 一、添削部は当分次の四人が担当する。

- 古川政記(東京都北区東十条五ノ一五ノ九日本歌人発行所) ○堀内民一(奈良県北葛城郡河合村佐味田) ○前川緑(奈良市坊屋敷町日本歌人社) ○宮崎智恵(東京都武蔵野市西窪六五)
- 一、添削料は十首まで二百円、但し返信用切手封皮同封直接添削担当者宛申込むこと

日本歌人 第十一巻 第九号 定価八十円 下四円

昭和三十五年九月二十日 印刷
昭和三十五年九月二十五日 発行

発行人 古川 政記
編輯人 前川佐美雄
東京都北区東十条五ノ一五ノ九古川方

日本歌人発行所

振替 東京六七二四五
電話 四七二二三七
奈良市坊屋敷町四一前川方
日本歌人社
振替 大阪四七三三七